平成17年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2006

新潟県長岡市教育委員会

平成17年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2006

新潟県長岡市教育委員会

例　言

1　本書は、長岡市内で計画された開発工事に先立って、平成17年度に実施した遺跡の試掘・確認調査の記録である。

2　調査にかかる経費は、国庫補助金と県費補助金の交付を得ている。

3　調査は、長岡市教育委員会科学博物館が主体となって行った。

4　本文の執筆は、1を駒形が担当し、その他は各調査担当者が分担して行い、編集は池田が行った。図版などの作成は整理作業員の協力を得た。

5　遺物番号は遺跡ごとの通し番号である。

6　土層柱状図における ▭ は遺物包蔵層を示す。

7　出土遺物や写真及び測量図面などの記録類は、長岡市教育委員会が保管している。

8　現地調査から本書の作成に至るまで、多くの方からご協力、ご教示を賜りました。記して御礼を申し上げます。

三条農地事務所　帝国石油株式会社新潟鉱業所長岡鉱場　長岡地域振興局農林振興部農地整備課
新潟県立歴史博物館　浅井勝利　安藤正美　春日真実　関　雅之　田中一穂　戸根与八郎
藤森健太郎　前嶋　敏　三ツ井朋子

目　次

1　平成17年度長岡市内遺跡発掘調査の概要……1
2　寺泊潟地区試掘確認調査……4
3　宮内館跡確認調査……8
4　大保・横山地区試掘調査……12
5　桂町地区試掘調査……13
6　富島地区遺跡確認調査……14
　西八町遺跡……15
　抜間遺跡……16
　盲田遺跡……18
　五百刈遺跡……20
　浅田遺跡……22
7　深沢地区試掘調査……24
8　越路原地区試掘調査……25
9　飯塚原地区試掘調査（飯塚原A遺跡）……26
10　上段遺跡確認調査……28
11　小国北部地区試掘調査……31

1　平成 17 年度長岡市内遺跡発掘調査の概要

(1)　はじめに

長岡市は、「人は財(たから)、いきいき都市・新ながおか」を合言葉に、平成 17 年 4 月 1 日に中之島町、越路町、三島町、山古志村、小国町の 5 町村と、平成 18 年 1 月 1 日には栃尾市、寺泊町、与板町、和島村の 4 市町村と合併した。人口 287 千人、面積 840 平方 km の新しい長岡市が誕生した。この平成の大合併により、長岡市は日本海と面するようになり、市域の中央部を流れる信濃川の左右には米どころ新潟を象徴する新潟平野が広がり、西には西山丘陵と通称される東頸城丘陵が南北に連なり、東には栃尾盆地から標高 2 千 m 近い守門岳など、市内にはさまざまな地形が見られるようになった。

そして、長岡市に所在する周知の遺跡は 1,254 箇所になった。このなかには国史跡の馬高・三十稲場遺跡、藤橋遺跡、八幡林官衙遺跡、新潟県指定史跡の横滝山廃寺、栖吉城跡、栃尾城跡、与板城跡、本与板城跡が含まれている。馬高・三十稲場遺跡は、信濃川左岸の河岸段丘上に位置する縄文時代中期から後期の集落跡で、縄文土器を象徴する火焔土器が発掘された遺跡として広く知られている。馬高・三十稲場遺跡の近くに位置する藤橋遺跡は、首飾りの玉類を生産していた縄文時代晩期の集落跡である。八幡林官衙遺跡（和島地域）は、養老年の年紀銘が墨書された木簡「祝 沼垂城」をはじめ、大量の木簡や墨書土器などが出土した遺跡で、8 世紀前半から 10 世紀初頭までの古志郡に関係する官衙関連の遺跡である。

横滝山廃寺（寺泊地域）は、7 世紀末の寺院跡と考えられた遺跡である。また、栖吉城跡は中世の古志長尾氏、栃尾城跡（栃尾地域）は上杉謙信に関係する山城跡で、与板城跡（与板地域）は上杉謙信の跡目を継いだ上杉景勝を支えた直江兼続の居城であった。与板城跡から 2km 離れて位置する本与板城跡も直江氏と関係する山城である。

国や新潟県指定史跡が語るように、長岡市に所在する遺跡は、国や新潟県、それに地域の歴史がたどれる。それだけに、新長岡市の埋蔵文化財保護行政は、これまで以上に遺漏のないように努めなければならない。

第 1 図　長岡市の位置

(2)　平成 17 年度調査の概要

今年度の市内遺跡発掘調査は、周知の遺跡 15 遺跡を含む 10 地区で行った。調査のきっかけとなった開発計画の内訳は、県営ほ場整備事業に関連した遺跡確認・試掘調査が、中之島中部地区、中之島南部地区、富島地区、中里南地区の 4 地区、経営体育成基盤整備事業関連が寺泊潟地区と小国北部地区、それ以外では市道改良工事が 1 箇所（越路原地区）、民間事業者の天然ガス開発関連が 2 箇所（飯塚原地区、深沢地区）、それに携帯電話の中継局建設計画が 1 箇所（桂町地区）であった。

遺跡の確認・試掘調査は、土地を掘削する工事や恒久的な建物を建設するなどの開発計画に対して、開発事業者と遺跡の保存方法（現状保存、盛土保存、発掘しての記録保存）を検討する協議資料を得ることが目的である。平成 17 年度は、ほ場整備事業関係が 6 地域と大半を占めていた。ほ場整備事業は広い面

積を対象とするだけに、一つの事業計画地に含まれる周知の遺跡や未周知の遺跡の数は多く、富島地区の場合は周知の遺跡だけで当初計画では7遺跡が対象となっていたほどである。

また、平成17年度の調査で新たに発見された遺跡は、中之島中部地区の宮内鴨田遺跡、上狐興野遺跡、長呂遺跡と、飯塚原地区の飯塚原A遺跡の4遺跡である。宮内鴨田遺跡、上狐興野遺跡、長呂遺跡は平安時代の土師器と須恵器が出土した遺跡で、包含層は水田面からほぼ1m下のところに位置している。3遺跡が所在するところは、信濃川右岸で、信濃川と並行する猿橋川の近くにある。信濃川下流域は、大河津分水路が完成する前まで、「横田切れ」をはじめ多くの大洪水を引き起こしてきた河川である。それだけに信濃川から200～600mほどのところに平安時代の遺跡が位置していたことを確認した意義は、考古学上からも埋蔵文化財保護行政の立場からも大きいといえよう。

(3)　調査体制

遺跡の確認・試掘調査は、長岡市教育委員会が調査主体となって実施した。遺跡の確認・試掘調査に至るまでの間の経緯や、合併前の地域に精通していることなどから合併前に勤務していた地域の職員が担当することとした。なお、寺泊地域における確認・試掘調査は、長岡市との合併前の事業であるが、合併後に編集した本書に遺跡確認・試掘調査の内容等を報告するものである。

(4)　調査の方法

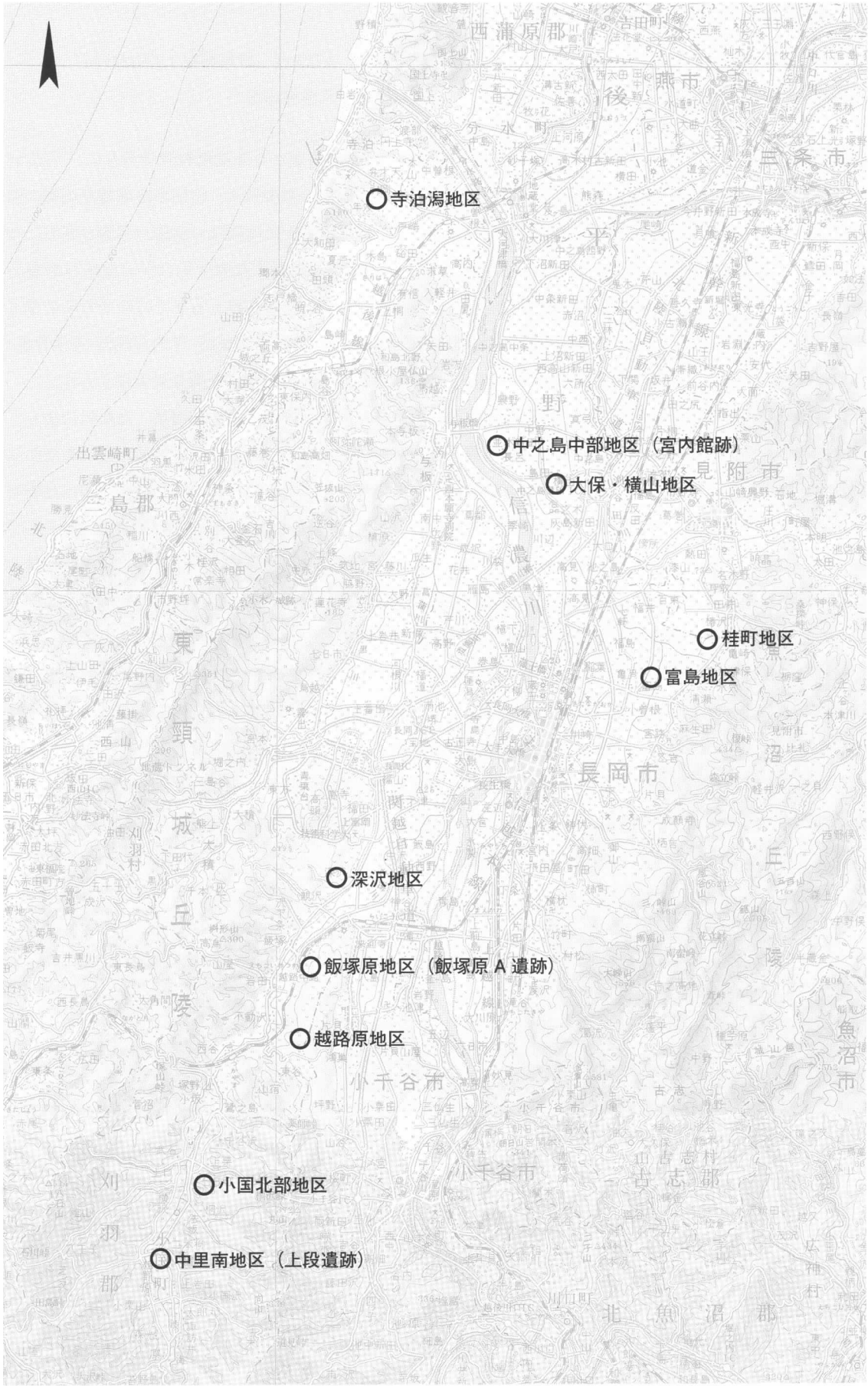
開発予定地を対象にして、遺跡が存在するかの有無、遺跡の平面的な広がり、それに遺物包含層の深さと厚さを探ることを主な目的とした遺跡の確認・試掘調査は、短い時間の中でより多くの箇所（発掘トレンチ）を発掘する必要があるため、土木機械を使用して調査を進めることが一般的である。今年度の確認・試掘調査もバックホウで掘削することを原則として進めた。そして、富島地区の五百刈遺跡などのように遺物が比較的多く出土した場合には、人力に切り替えて調査を行った。また、確認した遺構は、確認面での平面図を作成することはもとより、遺構の性格を明確にするために発掘することもある。

写真1　富島地区調査状況

このように、長岡市の遺跡確認・試掘調査は、調査の進捗状況などに応じて、バックホウなどの機械類と人力を併用しながら行った。

平成17年度調査は、県営ほ場整備事業計画に伴うものが多く、調査対象地は水田であることが多い。調査後に埋戻しをした水田で、トラクターなどの耕作機械が埋没した事例が、新潟県の研修会などで数件報告されていた。このため、必要に応じて砂を入れるなど、水田耕作に影響を及ぼさないような措置を執りながら調査を進めた。

写真2　埋戻し状況



第２図　平成 17 年度調査位置図（1/200,000）

2　寺泊潟地区試掘確認調査

調 査 地　長岡市寺泊潟地区　　調査面積　3,420 ㎡（対象面積 1,370,000 ㎡）

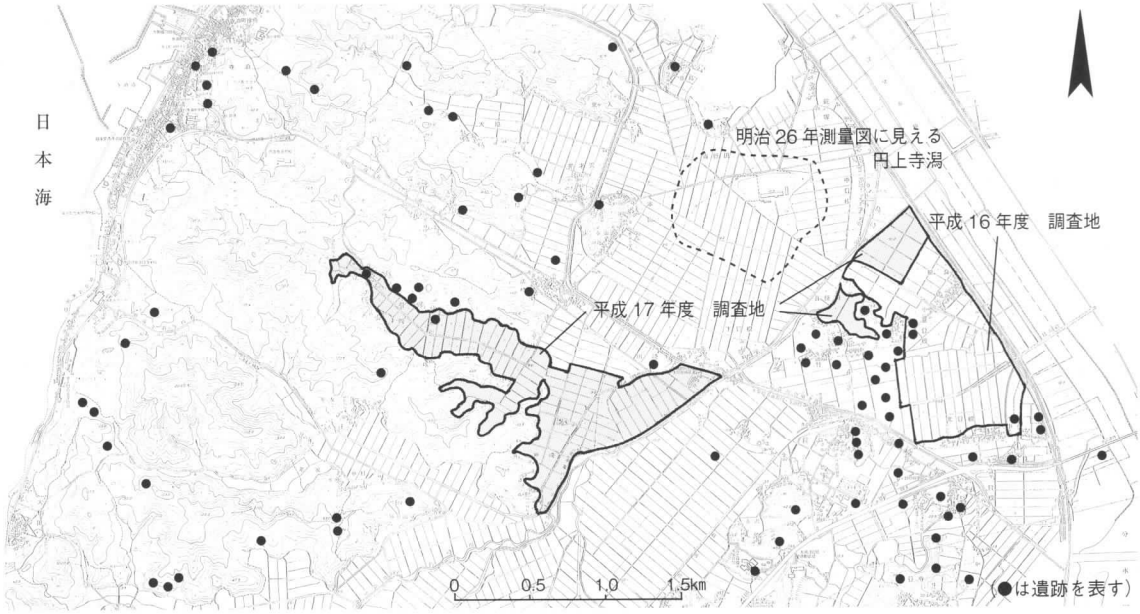
調査期間　平成 17 年 9 月 27 日～ 11 月 11 日　　調査担当　八重樫由美子

調査に至る経緯　平成 15 年秋、長岡地域振興局農林振興部農地整備課から寺泊町教育委員会に、平成 16 年度以降に事業着手が予定される経営体育成基盤整備事業（長岡市寺泊潟地区）に関わる埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。その後の協議を受けて、事業対象地 505ha には周知の遺跡が複数存在し、今後も新たに遺跡が発見される可能性が高いと判断し、工事着手前に寺泊町教育委員会が試掘確認調査を実施することとなった。調査は事業採択を受けた地区から順に行い、全域を終えるまでに約 6 年を必要とすることを双方で確認した。試掘確認調査の 2 年目である平成 17 年度は、寺泊新長・寺泊当新田・寺泊竹森・寺泊戸崎・寺泊法崎・寺泊引岡・寺泊川崎・寺泊下曽根・寺泊鰐口の約 137ha を調査対象地とした。

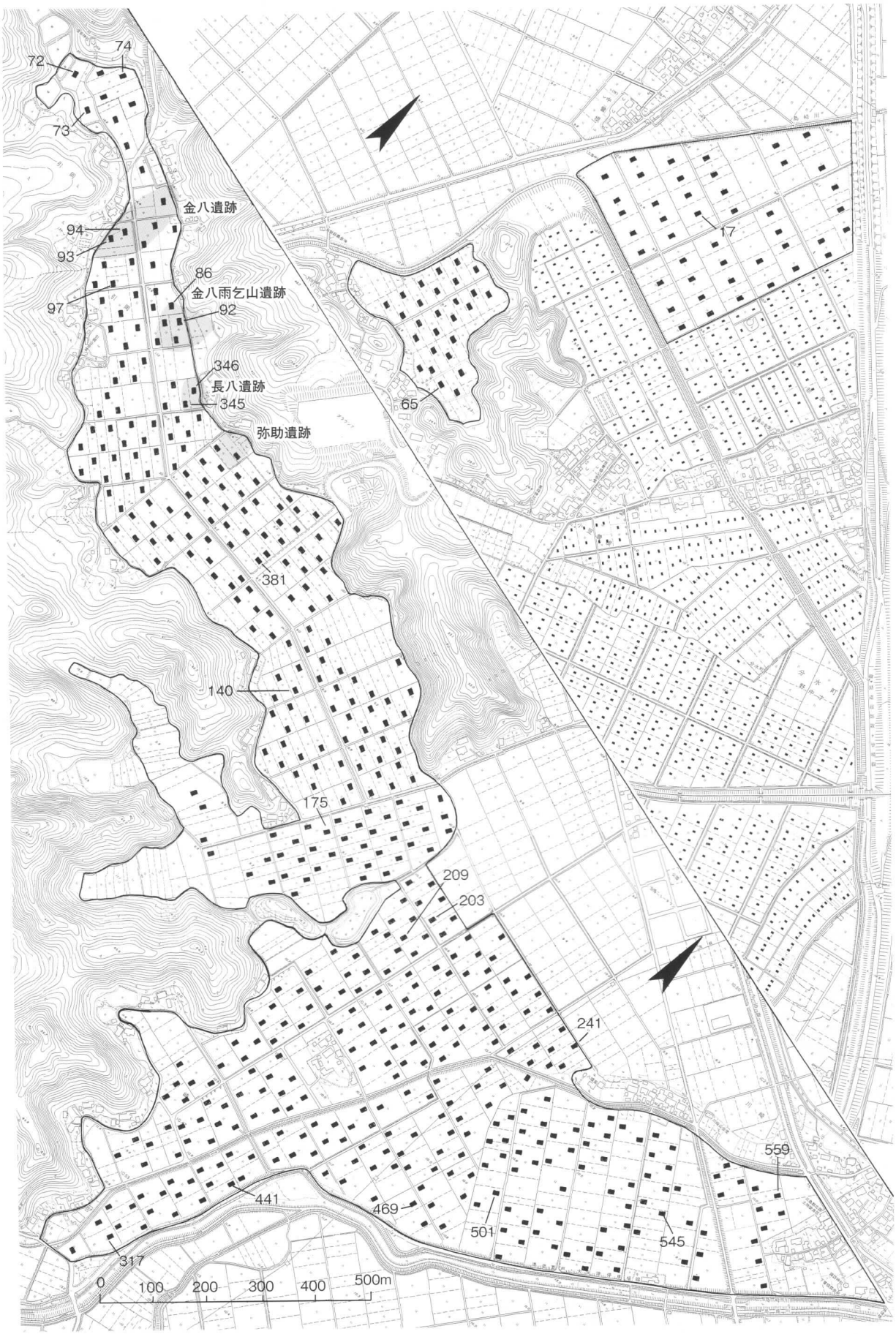
調査地の概要　長岡市寺泊潟地区は、信濃川大河津分水路の左岸に位置し、第 2 級河川・島崎川によって形成された沖積地の先端を占める地域である（第 3 図）。海岸線までは 3km と近いが、その間に横たわる東頸城丘陵が視界を遮るため、潟地区から海を臨むことはできない。島崎川はこの東頸城丘陵の内陸部を丘陵に沿うように北東方向に流れ、西蒲原郡分水町付近で信濃川に合流する。排水能力が乏しい川として知られており、そもそも上流と下流との標高差があまりないことに加え、日本海への有効な排水口を持たないことが原因と考えられる。それゆえ、信濃川の高水位時には信濃川の川水が島崎川へ逆流すること珍しくなく、近世文書には島崎川下流一帯の村々が悪水抜きに難渋したという記録が残されている。

潟地区一帯は特に標高が低く、昭和初期に日本海側への放水路として円上寺隧道が完成するまでは、「円上寺潟」という潟湖が存在した。潟地区という地名もこれに由来するものである。円上寺隧道の完成後は干拓や埋立てが進み、現在は一帯に豊かな田園地帯が広がっている。

周知の遺跡は東頸城丘陵から派生する小丘陵の斜面裾部や、島崎川により形成された自然堤防上に立地する傾向があり、平成 17 年度調査対象地には金八遺跡、金八雨乞山遺跡、長八遺跡、弥助遺跡の 4 遺跡が存在する。これらはいずれも古代の遺跡である。



第 3 図　調査地周辺の地形と遺跡（1/50,000）



第４図　トレンチ位置図（1/10,000）

調査の結果　ほ場整備対象地に任意に 2m × 3m の調査トレンチを設定し（第 4 図）、バックホウにより掘削を行い、遺物・遺構の有無や土層堆積状況を記録した。その後の埋戻しは、今後の耕作に支障が出ないよう、埋土に川砂を充填しながら行った。総トレンチ数は 570 箇所、調査面積は 3,420 ㎡である。

(1) 基本層序　潟地区の基本層序は 3 つのタイプに分類される。かつての円上寺潟周辺や、標高 8.5 ～ 9.5m の低い場所では、植物遺体を多量に含む腐植土が厚く堆積する（第 5 図 :17・65・140・175・317・381T、写真 5）。水を多く含み、非常に緩い地盤である。

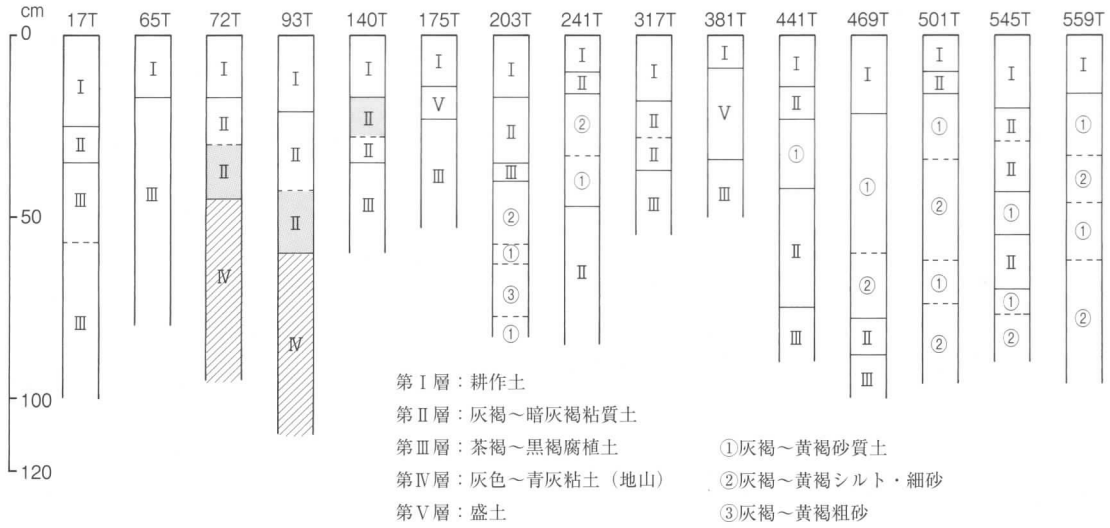
標高 9.5 ～ 11.0m の島崎川の自然堤防上やその氾濫原では、シルトや細砂を含む砂質土が多く堆積する（第 5 図 :203・241・441・469・501・545・559T、写真 6）。水はけが良く、地盤としては比較的安定しており、戸崎・川崎集落はこの上に立地する。

東頸城丘陵から派生する谷の最深部や丘陵裾部では、硬く締まった粘質土が堆積し（第 5 図 :72・93T）、現在の引岡集落や周知の 4 遺跡は、この上に立地する。このうち、標高 12.5 ～ 14.0m の丘陵裾部では、表土下 20 ～ 50cm で包含層（炭混じりの暗灰褐色粘質土）が確認できた。ただし、この包含層は部分的な広がりに留まり、その範囲はさほど広くない。

(2) 遺構・遺物　今回の調査で、遺構は検出されなかった。遺物は計 12 箇所のトレンチから、奈良・平安時代の土師器や須恵器、中世の珠洲焼など、合わせてコンテナ 0.3 箱分の土器が出土している（写真 7･8、第 1 表）。遺物が出土したトレンチのうち、93・94・97T は金八遺跡、86・92T は金八雨乞山遺跡、345・346T は長八遺跡の範囲に含まれる。弥助遺跡の範囲では遺物の出土がなく、遺跡の範囲が丘陵裾部寄りに限定される可能性が高い。

まとめ　調査の結果、今回の対象地に周知の 4 遺跡以外の新たな遺跡は確認できなかった。遺跡が存在する可能性が高いと考えられた、島崎川の自然堤防上―寺泊川崎・寺泊鰐口・寺泊法崎地内でも、遺物・遺構等は検出されず、同じ島崎川の上流域で古代遺跡（門新遺跡・下ノ西遺跡など）が集中する状況とは、異なった様相を見せている。今後はこの調査結果を元に、ほ場整備事業の実施設計ができ次第、周知の 4 遺跡の取扱いについて長岡地域振興局農林振興部農地整備課と再協議を行なう予定である。

参考文献：寺泊町 1991『寺泊町史』資料編 1 原始・古代・中世



第 5 図　潟地区試掘確認調査土層柱状図（1/20）

写真３　調査対象地近景（寺泊引岡地区）

写真４　発掘風景

写真５　17T 土層断面

写真６　501T 土層断面

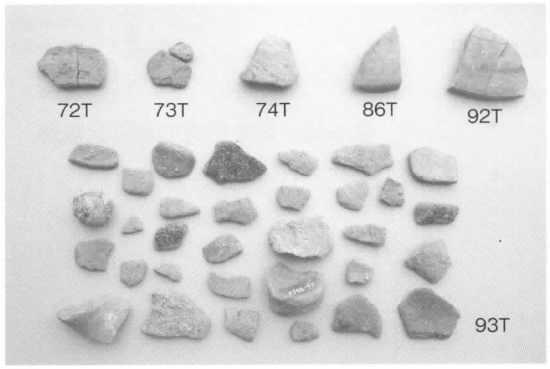


写真７　出土遺物（1）

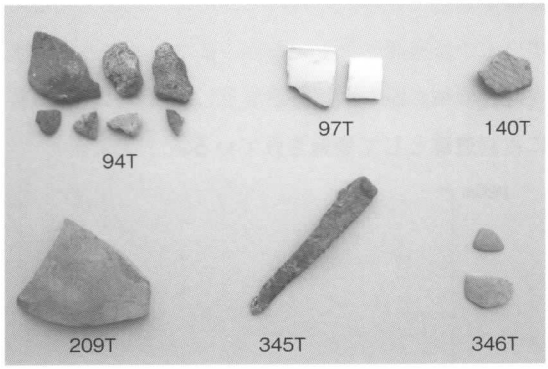


写真８　出土遺物（2）

第１表　遺物出土トレンチ一覧

トレンチ	深度（cm）	遺物出土層位	出土遺物数	備考	トレンチ	深度（cm）	遺物出土層位	出土遺物数	備考
72	95	第Ⅱ層	土師器片１		94	87	第Ⅱ層	土師器片７	金八遺跡
73	76	第Ⅱ層	土師器片２		97	62	第Ⅱ層	近世陶器片２	金八遺跡
74	70	第Ⅱ層	土師器片１		140	35	第Ⅱ層	珠洲焼片１	
86	65	第Ⅱ層	須恵器片１	金八雨乞山遺跡	209	77	第Ⅱ層	珠洲焼片１	
92	60	第Ⅱ層	須恵器片１	金八雨乞山遺跡	345	75	第Ⅲ層	鉄製品片１	長八遺跡
93	110	第Ⅱ層	土師器片32	金八遺跡	346	78	第Ⅲ層	土師器片２	長八遺跡

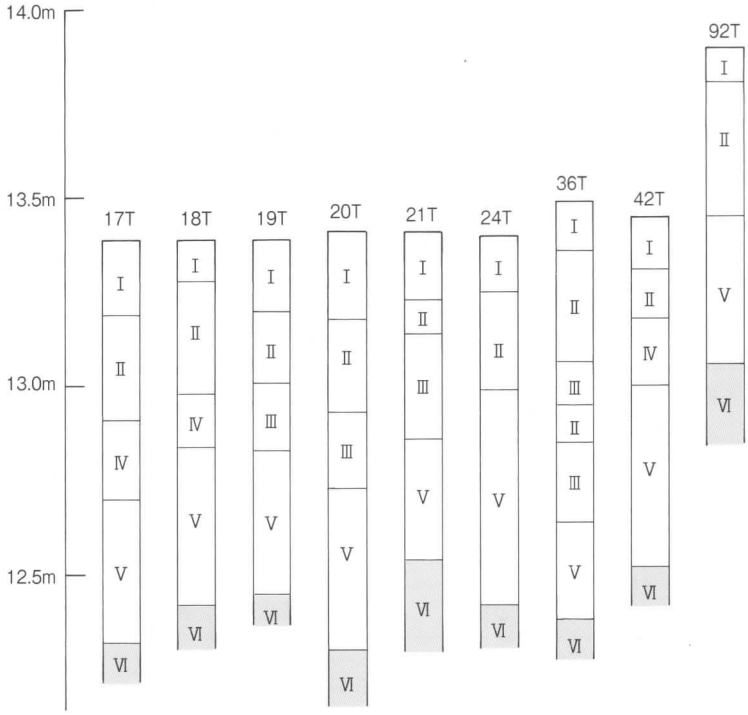
3　宮内館跡確認調査

調 査 地　長岡市中之島宮内字鴨田1570番地1ほか　　調査面積　576㎡（対象面積18,000㎡）
調査期間　平成17年10月17日～25日　　調査担当　小林　徳

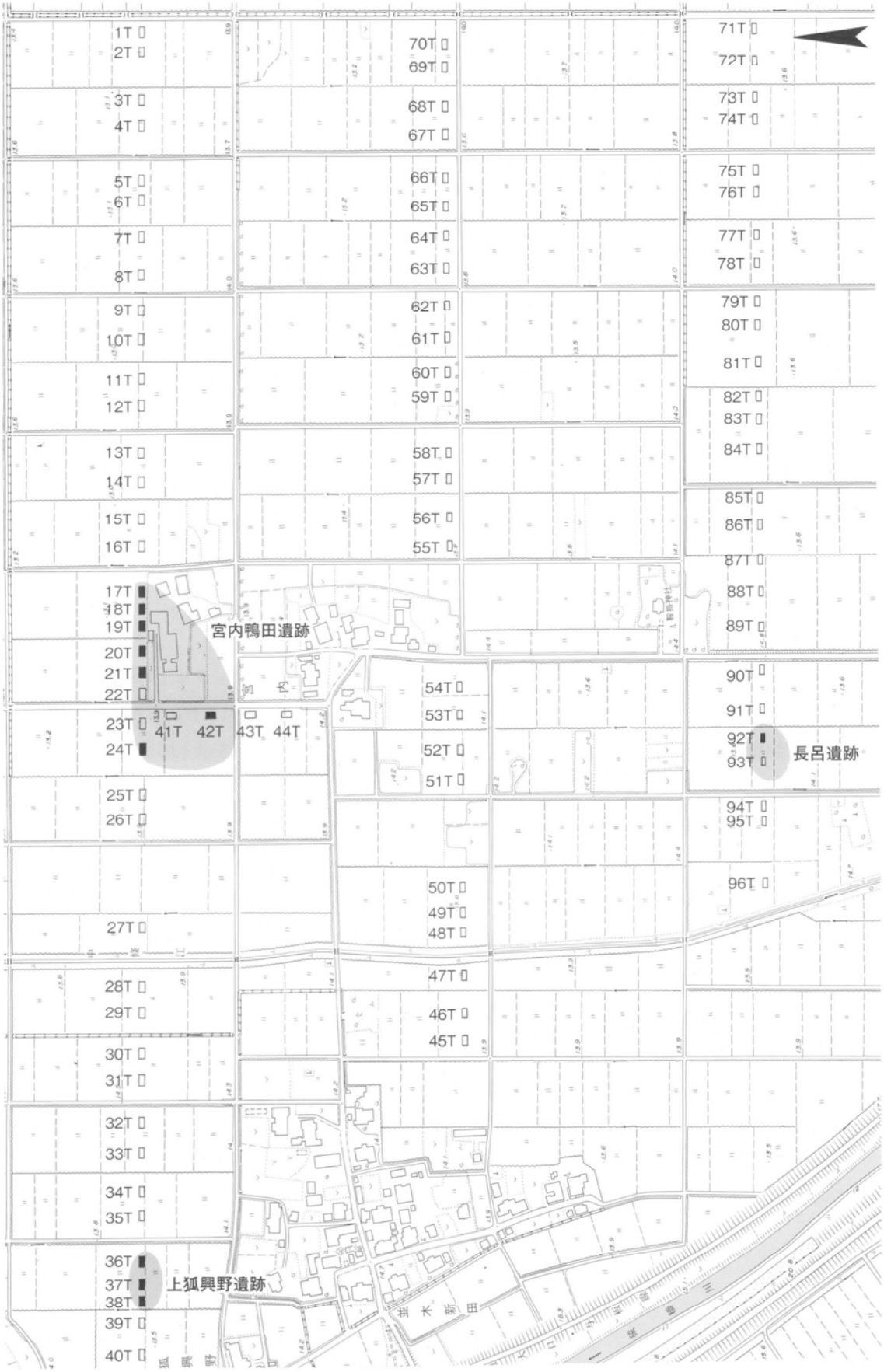
調査に至る経緯　平成16年12月事業主である新潟県三条農地事務所と中之島町教育委員会は県営ほ場整備事業中之島中部地区の平成17年度工事地区について埋蔵文化財の取扱いについて協議した。工事予定地内には宮内館跡が存在しているため、平成17年2月1日付け三農地756号にて埋蔵文化財発掘通知を新潟県教育委員会に提出した。3月24日に県教育委員会から遺跡の範囲確認の実施が必要との回答を得たため、5月16日に再度協議を行い、宮内館跡の範囲確認と同時に工事中の埋蔵文化財の不時発見を避けるため工事予定地内で確認調査を行うことで合意した。なお、工事予定地内で水田面の掘削が行われないことから、深く掘削する必要がある水路部分を調査することとした。

遺跡の概要　調査地周辺は刈谷田川、猿橋川、信濃川に囲まれた沖積低地上に立地する。遺跡の多くはこれらの低地にある自然堤防や微高地に存在している。宮内館跡は天文年間に長尾為景の臣森内記が居城したと『温古の栞』に記載され、慶長年間には廃城したと伝えられる。館の明確な位置は確認できていないが、小字名に館屋敷、二ノ丸、三ノ丸などが現存しており、おおよその範囲を推定できる。昭和29年に土地改良が行われたことにより館跡は全壊しているといわれてきたが、現在までどの程度破壊されているかは確認されていない。また、このときの土地改良時に平安時代の須恵器や土師器が出土しており、現在集落の中心部付近に古宮遺跡として登録されている。

第6図　調査周辺の地形と遺跡
（1/50,000）



第7図　土層柱状図（1/20）



第 8 図　調査トレンチ位置図 (1/5,000)

調査の結果　トレンチを水路計画地に 2m × 3m の大きさで任意に設定し（第 8 図）、バックホウにて慎重に掘削を行い、遺物や遺構の検出時には人力による調査を行った。調査範囲全体の層序や遺構について記し、遺物については登録した遺跡ごとに記述する。

(1) 基本層序　調査地全般で地表面より 50cm ほど下で砂粒が多く混入した層が見られた。周辺ではたびたび信濃川や猿橋川の氾濫が記録されており、砂粒を含む層が 2 ～ 3 層に分けることできるトレンチも存在することから数度の洪水の結果と見られる（第 7 図）。

(2) 遺構・遺物　今回の調査で遺構は検出されなかったが、11 箇所のトレンチで遺物が出土した（第 2 表）。出土量などから宮内鴨田遺跡、上狐興野遺跡、長呂遺跡の 3 箇所を埋蔵文化財包蔵地として新潟県教育委員会に通知した。また、宮内館跡は痕跡が見られず、土地改良などにより全壊した可能性が高い。

＜宮内鴨田遺跡＞ 17T ～ 24T 及び 41T ～ 42T 周辺（第 9 図 1 ～ 3、13 ～ 18）

1 は内外面ヨコナデの土師器坏で、2 は底部に篦切り痕を残す須恵器坏で佐渡小泊産の 9 世紀前半と見られる。3 は高台を持つ須恵器壺類の底部である。13 ～ 17 は同一個体の土師器甕で、叩き調整の後にヨコナデがなされ、内面に一部同心円当て具痕が見られる。また、珠洲焼壺類の破片も 1 点出土した (18)。

＜上狐興野遺跡＞ 36T ～ 38T 周辺（第 9 図 4 ～ 6、19 ～ 24）

4 は土師器高坏の脚部である。5 と 19 ～ 24 は口縁部をヨコナデし、頸部以下に刷毛目調整を施した土師器甕で同一個体と見られる。焼成があまり良くないためか非常にもろい。6 は土師器甕と見られる底部片である。

＜長呂遺跡＞ 92T 周辺（第 9 図 7 ～ 12、25）

7・8 は土師器長甕で、口縁端部に面を作り、頸部が「く」の字状に屈曲する。9 は土師器鍋の口縁部で口縁部を肥厚させて端部をつまみ出している。10･11 は土師器坏で内外面をヨコナデにより整形している。12 は底部に篦切り痕を残す須恵器坏で佐渡小泊産の 9 世紀後半と見られる。25 は土師器甕胴部片で外面に叩き痕、内面に同心円当て具が見られる。

第 2 表　宮内館跡確認調査遺物出土トレンチ一覧

トレンチ	深度(cm)	遺　物	備　考	トレンチ	深度(cm)	遺　物	備　考
17	117	土師器、須恵器	宮内鴨田遺跡	36	120	土師器	上狐興野遺跡
18	109	土師器、須恵器	〃	37	115	土師器	〃
19	102	土師器、須恵器	〃	38	140	土師器	〃
20	126	須恵器	〃	42	104	須恵器	宮内鴨田遺跡
21	112	土師器、須恵器	〃	92	106	土師器、須恵器	長呂遺跡
24	110	土師器	〃				

写真 9　調査地遠景

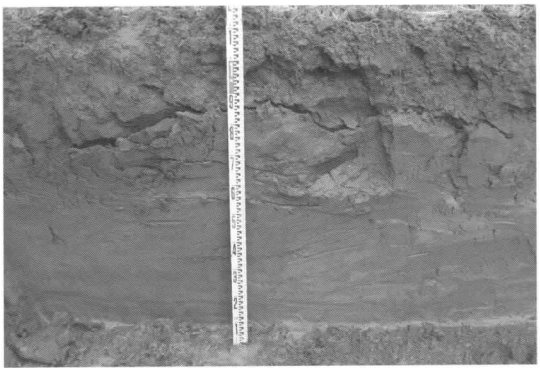


写真 10　18T 土層断面

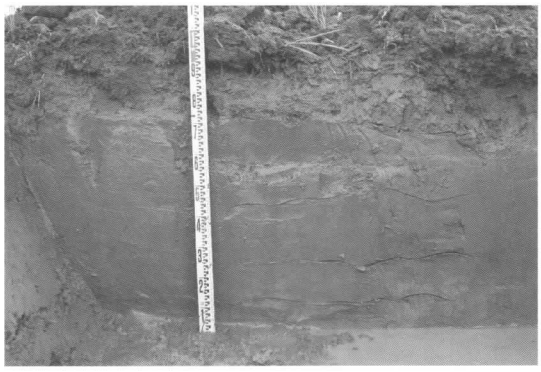


写真 11　92T 土層断面

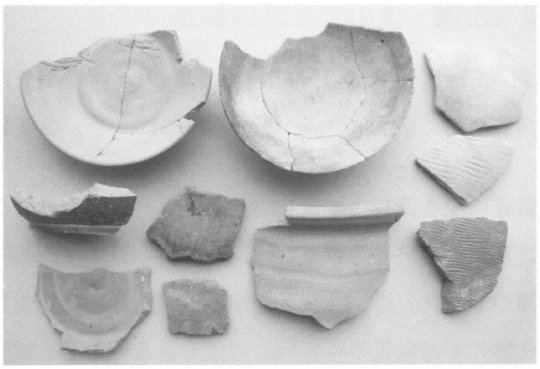
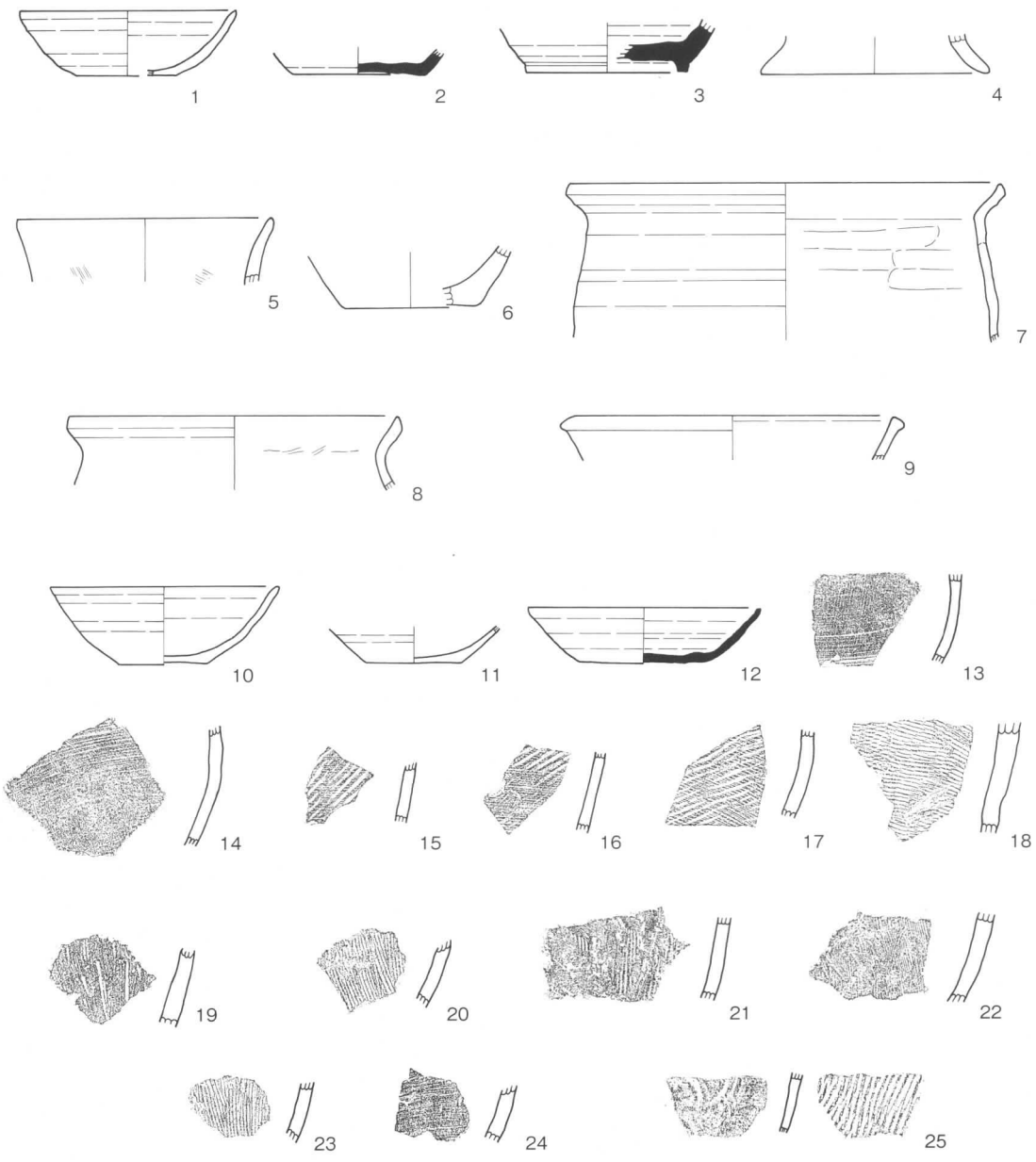


写真 12　出土遺物



第 9 図　宮内館跡確認調査出土遺物 (1/4)

4　大保・横山地区試掘調査

調 査 地　長岡市横山 853 番地 ほか　　調査面積　400 ㎡（対象面積 10,710 ㎡）
調査期間　平成 17 年 6 月 20 日～ 24 日　　調査担当　小林　徳

調査に至る経緯　平成 17 年 5 月 16 日、新潟県三条農地事務所と長岡市教育委員会が県営ほ場整備事業中之島南部地区の平成 17 年度工事地区について埋蔵文化財の取扱いについて協議した。事業予定地内に周知の埋蔵文化財は存在しなかったが、横山権現堂遺跡などの遺跡が周囲にあることから、工事時の埋蔵文化財の不時発見の可能性を否定できないため、試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認することで合意した。また、調査箇所は深く掘削する場所が水路部分のみであるため、ほ場整備事業地のうち水路を計画しているところを試掘調査することとなった。

遺跡の概要　調査地は信濃川右岸の沖積低地に位置し、信濃川や東に流れる刈谷田川の氾濫により形成された微高地や自然堤防上に古墳時代以降の遺跡が存在している。調査地周辺にはこのような微高地上に横山権現堂遺跡、高畑遺跡、杉之森遺跡などが点在している。また、住民によると調査地周辺では昭和初期に盛土などをしたが、それ以前は低湿地帯であったという。

調査の結果　2m × 3m の試掘トレンチを水路計画地上に任意に設定し、バックホウで慎重に掘削を行い、遺物や遺構の検出時には人力による調査を行った。耕作土層の下は暗灰色～青灰色粘土層が厚く堆積しているが、一部の範囲で木の幹の腐敗土層が見られることから、周辺は低湿地であったが、場所により林野が広がっていた可能性がある。

遺物は、36T の耕作土と粘土層のあいだにおいて須恵器片が 1 点出土し、周辺の現水路内においても須恵器片 1 点、土師器片 5 点を採集することができたが、いずれも小破片であり、客土に混入していた可能性が高い。

明確な包含層がないことからも遺跡が存在する可能性は低く、事業に支障がない旨を事業者に伝えた。

第 10 図　調査トレンチ位置図（1/10,000）

写真 13　調査地遠景

写真 14　38T 土層断面

5　桂町地区試掘調査

調 査 地　長岡市桂町字早生田 1528 番地 1 ほか　　調査面積　4 ㎡ (対象面積 196 ㎡)

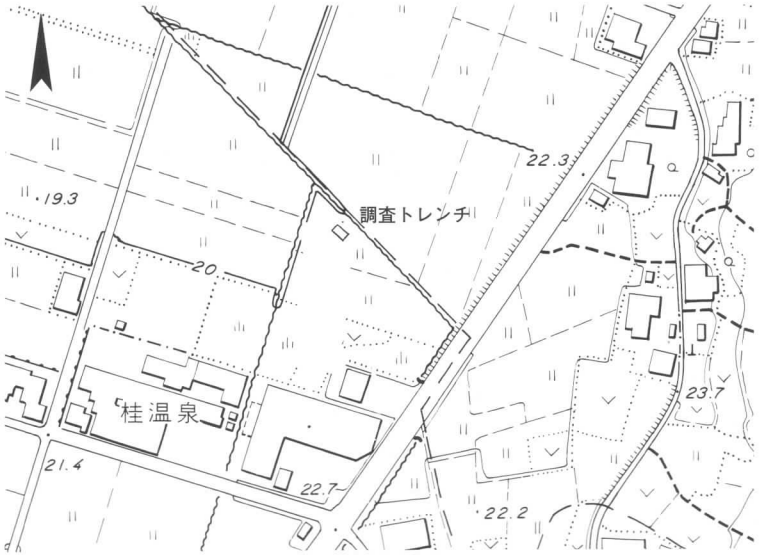
調査期間　平成 17 年 5 月 23 日　　調査担当　小林　徳

調査に至る経緯　平成 17 年 5 月 10 日に携帯電話の中継基地設置に伴い、周知の埋蔵文化財の有無の確認が長岡市教育委員会にあった。翌 11 日には現地確認を行い、1) 現在周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、周辺に遺跡が多く存在すること、2) 扇状地の端に位置する可能性があり、工事予定地付近においてこのような地形に遺跡が立地する例が近年続いていることから、工事中の不時発見を防止するため試掘調査が必要であることを回答し、早期に調査をすることで両者が合意した。この合意を受け、5 月 23 日に試掘調査を行った。

遺跡の概要　調査地は東山丘陵の西裾に位置し、浦加桂川などによって形成された扇状地と沖積平野の境界付近に縄文時代以降の遺跡が数多く存在する。古くから知られていた横山遺跡、原山遺跡のほかにも、近年の分布調査や試掘調査などにより藤ヶ森遺跡、五斗田遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が発見され続けている。

調査の結果　工事予定地内にて任意の位置に 1.6m × 2.5m のトレンチを設定し、バックホウで慎重に掘削した。70 ～ 80cm の盛土が認められたことから調査地は造成されたものと考える。盛土の直下からは暗灰色もしくは暗青灰色の粘土層が厚く堆積しており、過去においては低湿地帯であった可能性が高い。

遺構・遺物は検出されず、調査地は扇状地から外れていると判断でき、遺跡が存在する可能性はきわめて低いことから、工事に支障がない旨を事業者に伝えた。



第 11 図　調査トレンチ位置図（1/2,500）

写真 15　調査地遠景

写真 16　トレンチ土層断面

6　富島地区遺跡確認調査

調査に至る経緯　長岡市富島町の周辺には、「八丁沖」と呼ばれる低湿地帯が広がり、遺跡が存在する可能性が極めて低いと考えられていた。平成16年7月13日に発生した「7・13水害」では富島町の東を流れる猿橋川など、地域を流れる中小河川が決壊して、八丁沖を含む広範な地域が水没した。この状況からも富島地区を含む地域一帯には集落遺跡が存在する可能性の低いことを示していると思われた。

しかし、平成16年春に八丁沖を含む富島町周辺を対象とした県営ほ場整備事業が計画されたことを長岡市農林部から伝えられ、直ちに遺跡の分布調査を行い、計画地内の7箇所から弥生土器、土師器や須恵器それに珠洲焼などの土器を採集した。遺物を採集した箇所は、主に水田の用排水路付近であった。これは春耕前の泥上げなど、用排水路の清掃によって遺物が水路の壁面や土手などに上げられたもので、遺物の包含層が浅いと推察された。

なお、遺物を採集した7地点を地名から西八町遺跡（にしはっちょう）、抜間遺跡（のげま）、盲田遺跡（めくらだ）、五百刈遺跡（ごひゃっかり）、古村遺跡（ふるむら）、浅田遺跡（あさだ）、榎町遺跡（えのきまち）として、遺跡周知化の手続きを執った。そして、新遺跡の発見は、ほ場整備事業の主体を予定している新潟県長岡地域振興局農林振興部と長岡市農林部に伝え、合わせて平成17年度に遺跡の確認調査を予定することも伝えた。しかし、平成16年度は秋に発生した新潟県中越地震の災害復旧に追われ、長岡地域振興局農林振興部や地元協議会、土地改良区など、ほ場整備事業の主体者側との協議は十分に行うことができなかった。主体者側との打合せは、地震の災害復旧が軌道に乗った平成17年春にようやく再開し、数回の協議後に稲の収穫後の9月下旬から遺跡の確認調査を行うことで合意した。

調査の経過　富島町地内の遺跡確認調査は、10月初めに調査地の近くに現場事務所を設置することから始めた。調査は平成16年春の分布調査で須恵器などの土器が採集された地点を中心に、2m × 4mを原則とした調査トレンチを設けてバックホウを中心に行い、遺物の出土や遺構が確認されたときは人力に切り替えて発掘を進めた。

そして、遺跡の平面的な広がりを確認するために、各遺跡の状況に応じて調査トレンチを設定しながら調査の範囲を広げていった。

なお、調査はバックホウを2台使用し、調査員と作業員を2班に編成して、北の西八町遺跡から、五百刈遺跡、抜間遺跡、盲田遺跡、浅田遺跡の順に進めた。しかし、五百刈遺跡や抜間遺跡などで大量の遺物や遺構が検出されたため、古村遺跡、榎町遺跡を継続して行うには、予算的にも気象条件などの面からも実施することができないと判断した。

これについては、ほ場整備事業の主体者側とも発掘現場などで協議して平成18年度に先送りすることで合意した。

第12図　富島地区遺跡分布図（1/20,000）

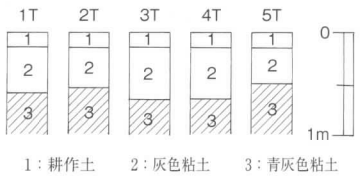
西八町遺跡

調 査 地　長岡市富島町字西八町　　調査面積　44 ㎡（対象面積 10,600 ㎡）
調査期間　平成 17 年 10 月 11 日　　調査担当　駒形敏朗

調査の結果（第 14 図）　西八町遺跡は、富島地区のほ場整備事業計画対象地の中では北部にあり、北上していた猿橋川が、東から流れてきた浦加桂川と合流して、西に曲がるところの左岸に位置している。現況は水田で、標高は約 15 ～ 16m である。調査は平成 16 年春の分布調査で須恵器が採集された水田を中心に、任意の 5 箇所に 2m × 4m のトレンチを原則として設置し、バックホウでトレンチを発掘した。

西八町遺跡は平成 16 年春の分布調査で平安時代と思われる須恵器の破片 4 点を採集し、新遺跡として周知化したばかりの遺跡である。しかし、今回の調査では遺構・遺物は確認できなかった。

基本層序（第 13 図）　水田耕作土である表土が 15cm ほどあり、その下層に、青みがかった灰色粘土層（35 ～ 50cm）、そして地山と思われる青灰色粘土層があり、この 3 層が基本層序である。また、浅いところで表土下 30cm、深いところで 50cm の位置で地下水が湧き出た。



第 13 図　土層柱状図（1/60）

まとめ　西八町遺跡の確認調査では遺構・遺物とも検出されなかった。五百刈遺跡や抜間遺跡で確認された灰褐色粘土層、暗灰色粘土層といった遺物包含層は、西八町遺跡では確認できなかった。

遺物の出土がなかったこと、および層序の観察から西八町遺跡は、積極的に遺跡ではないと考えられるが、周辺の水田面に須恵器の破片がほぼ一箇所にかたまって採集されていることから、遺跡の可能性を全面的に否定することはできない。今後における調査の機会に確認したいことがらである。

第 14 図　トレンチ位置図（1/5,000）

抜間遺跡

調 査 地　長岡市富島町字抜間　　調査面積　209.5 ㎡（対象面積 40,600 ㎡）

調査期間　平成 17 年 10 月 11 日～ 17 日　　調査担当　鳥居美栄

遺跡の概要　遺跡は福島町集落の東方約 300m に所在する。現況は水田だが、畑が若干散在している。分布調査では畑が営まれる微高地に隣接する用水路の周辺のみで遺物が採集されており、遺物包含層がやや深い位置にあると推測された。標高は 16 ～ 17m である。

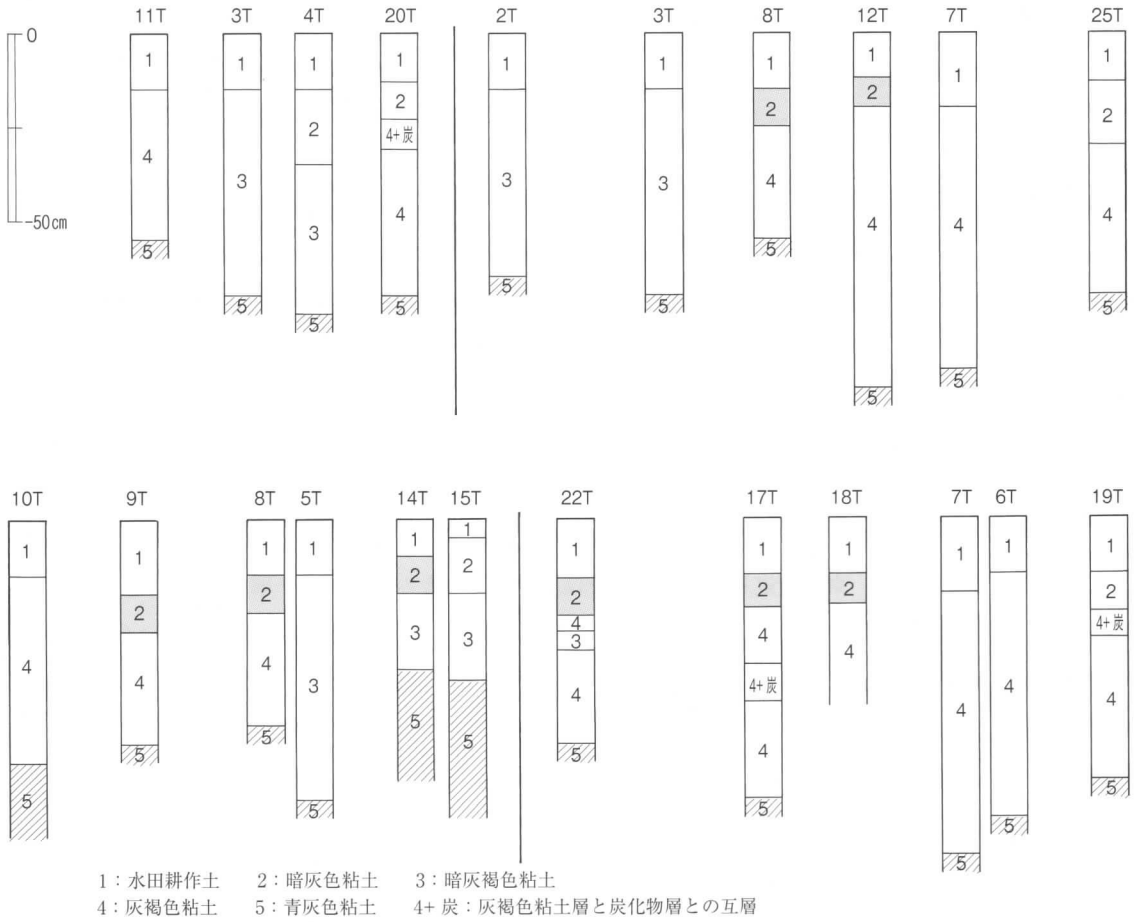
調査の結果　25 箇所の調査トレンチを設定し、12 箇所のトレンチで遺構・遺物を確認した。基本層序は耕作土、暗灰色粘土層、暗灰褐色粘土層、灰褐色粘土層、青灰色粘土層である。遺物は主に暗灰色粘土層から出土する。厚さ約 1cm の灰褐色粘土と厚さ約 5mm の炭化物とが互層をなすのを確認した箇所がある。

(1) 遺構　6 箇所のトレンチで遺構または遺構の可能性がある落ち込みを確認した。8T において柱穴とみられるピット 3 基を検出し、そのうち 1 基は柱根が残存していた。しかし、建物跡を推測できるような配列は確認できなかった。18T では覆土に遺物を含む長楕円形の土坑 1 基を検出した。また、23T では遺構とみられる落ち込みがあり、その中から土師器や木杭を検出した。

(2) 遺物　土師器、須恵器が出土したが、細片が多い。須恵器（1 ～ 4）は坏蓋、坏、壺・甕類があり、土師器（5・6）は甕、無台坏がある。9 世紀前半とみられるが、1 の坏蓋はやや古くなる可能性がある。5 は 23T の遺構らしい落ち込みから出土した。4 は表採資料である。

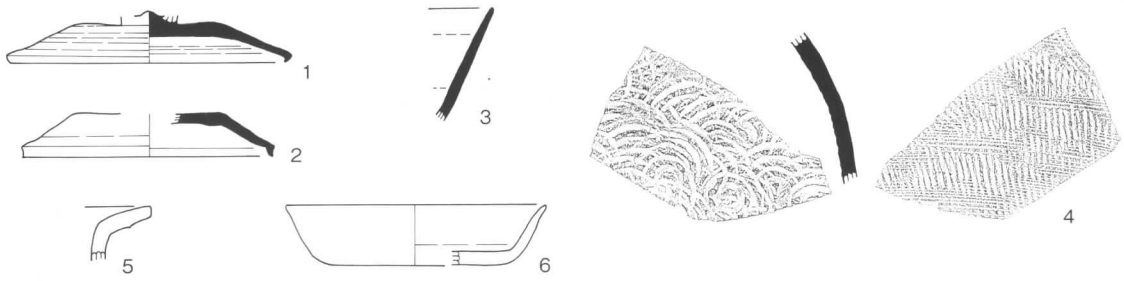
まとめ　分布調査からは遺跡範囲は南東から北西の方向に広がり、遺物包含層は深くにあると推測されていた。しかし、今回の調査では浅い位置から遺物・遺構が出土し、また、遺跡範囲は南北の方向に広がるとみられる。わずかではあるが柱穴や土坑などがあり、土師器・須恵器を出土していることから、自然堤防上に営まれた平安時代の小集落と考える。

第 15 図　トレンチ位置図（1/5,000）



1：水田耕作土　2：暗灰色粘土　3：暗灰褐色粘土
4：灰褐色粘土　5：青灰色粘土　4+ 炭：灰褐色粘土層と炭化物層との互層

第 16 図　土層柱状図（1/20）



第 17 図　遺物実測図（1/4）

写真 17　土坑検出状況（18T）

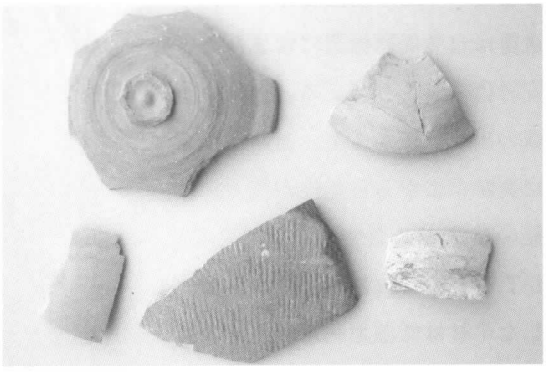


写真 18　出土遺物

盲田遺跡

調 査 地　長岡市富島町字盲田　　調査面積　173.2 ㎡（対象面積 44,500 ㎡）

調査期間　平成 17 年 10 月 17 日～ 27 日　　調査担当　鳥居美栄

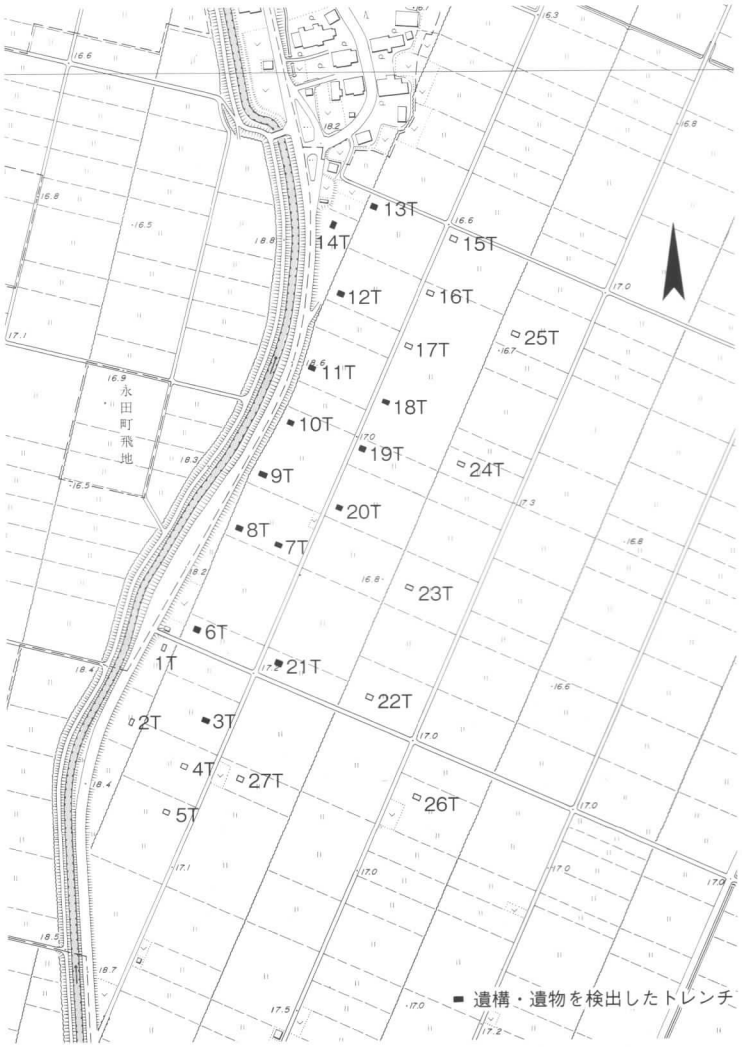
遺跡の概要　福島町集落の南東、富島町と福島町とをつなぐ道路の東側脇にある畑及び水田に所在する。福島町集落が営まれる自然堤防の縁辺から沖積地にかけて遺跡が立地している。分布調査では道路付近の水田で土師器・須恵器が多く採集されたが、東の水田や畑では遺物の散布は希薄になる。周辺の標高は 16.5 ～ 17m で、若干東に傾斜しているが、ほぼ平坦である。

調査の結果　27箇所の調査トレンチを設定した結果、遺構を確認したトレンチは4箇所、土師器・須恵器を出土したトレンチは9箇所で、調査対象地の西部分に集中する。基本層序は水田耕作土、暗灰色粘土層、灰褐色粘土層、暗青灰色粘土層、青灰色粘土（またはシルト）層で、青灰色粘土層が地山である。暗灰色粘土層は遺物を含むが、盛土の可能性もある。灰褐色粘土層は上層に遺物を含むが、遺物を含まない下層とは明瞭に分層できない。東に設定したトレンチでは植物遺体を含む黒褐色粘土層を確認した。

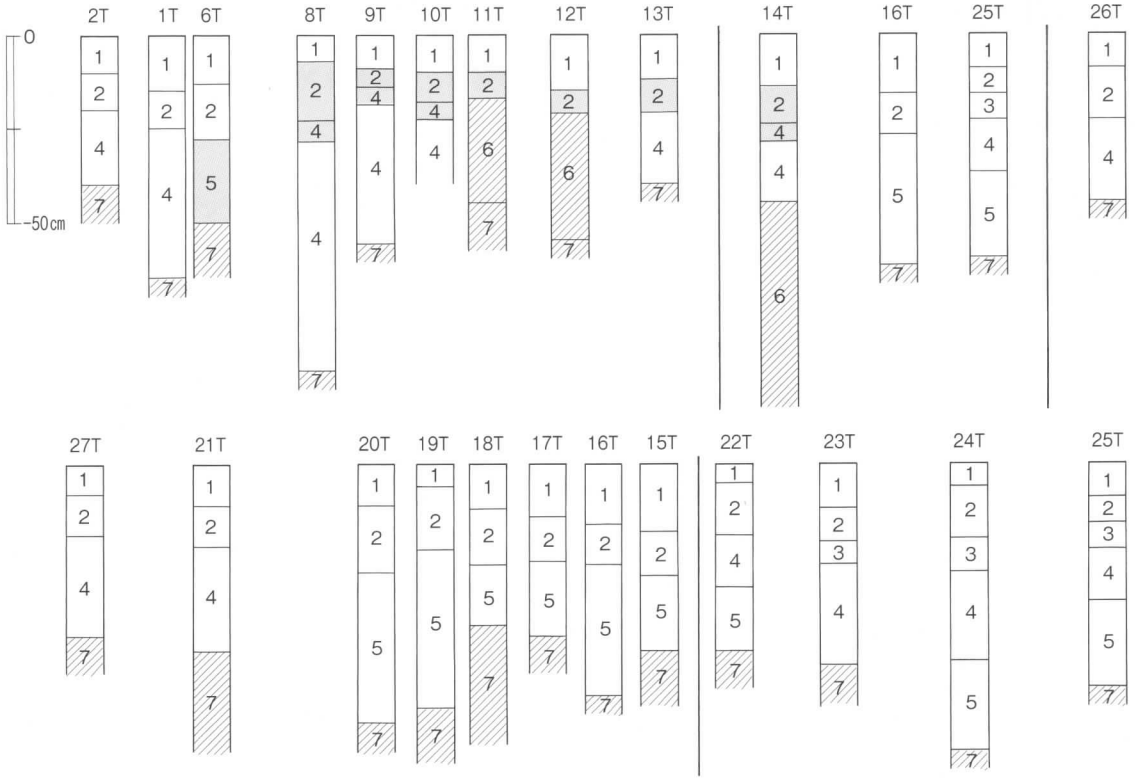
(1) 遺構　9T で 2 条、10T で 1 条の南北方向に伸びる溝状遺構を検出した。溝の覆土には土師器・須恵器が多く含まれている。溝の掘り込みは灰褐色粘土層の上面から確認できる。また、8T、11T では柱穴の可能性があるピットを検出した。そのほか、18T、19T、20T において、掘り込みなどは確認できなかったが、青灰色粘土中から杭や柱の可能性がある木材が出土した。

(2) 遺物　須恵器は無台坏（1 ～ 3）、有台坏（4 ～ 6）、壺・甕類（7）、横瓶（8）などが出土した。須恵器は小泊産のものと在地産のものがあり、9 世紀前半のものとみられる。土師器は坏類、長甕などが出土した。9 は 3T 出土の内面黒色処理の無台椀である。10 は 9T の溝から出土した坏である。

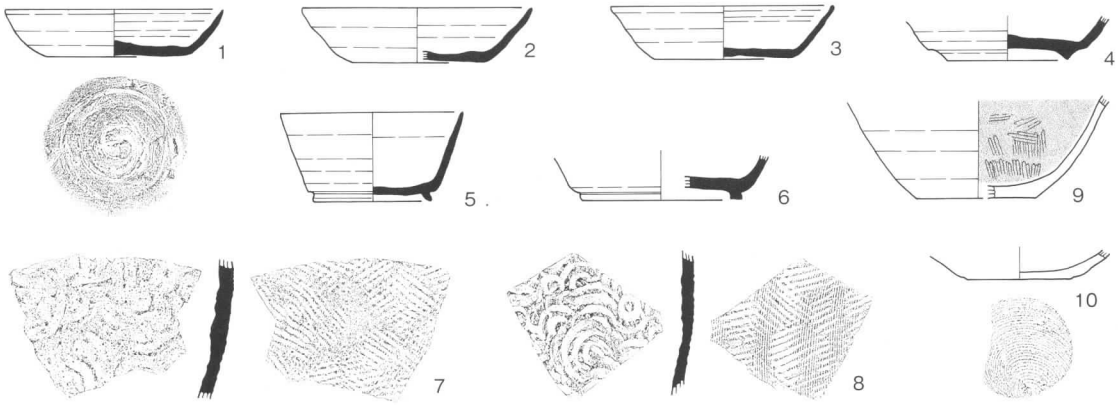
まとめ　今回の調査結果から、本遺跡は自然堤防縁辺に営まれた平安時代の集落と考える。遺物や遺構の出土状況からも、道路の西側に遺跡が広がる可能性が高く、今後の確認が必要である。さらに、18T などの青灰色粘土中から出土した木材は低湿地利用の痕跡の可能性があり、検討が必要である。



第 18 図　トレンチ位置図（1/5,000）



第 19 図　土層柱状図（1/20）



第 20 図　遺物実測図（1/4　　は内面黒色処理）

写真 19　溝状遺構 1 検出状況（9T）

写真 20　出土遺物

五百刈遺跡

調 査 地　長岡市富島町　　調査面積　388 ㎡（対象面積 76,500 ㎡）

調査期間　平成 17 年 10 月 11 日～ 31 日　　調査担当　新田康則

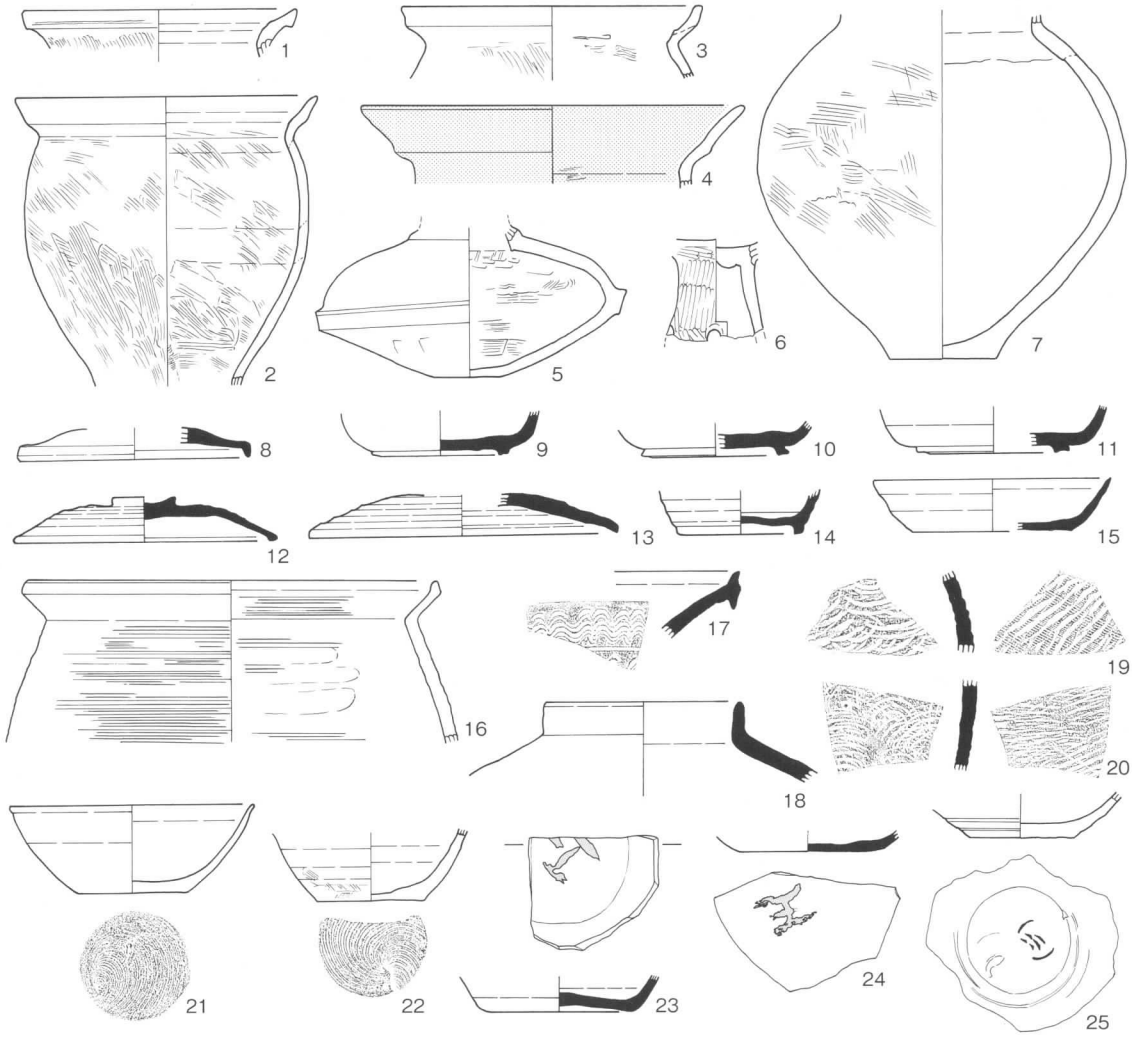
調査の結果　調査トレンチ 49 箇所のうち遺物包含層及び遺構を確認したのは 23 箇所である。しかし、残念ながら遺跡の性格が判明するような遺構配置を確認することはできなかった。また、弥生土器･須恵器･土師器・木製品など、約 3,000 点の遺物が出土した。

(1) 遺構　溝状遺構・井戸状土坑・土坑などを検出したが、出土状況から判断して、今回の調査で検出した遺構はいずれも平安時代に帰属する可能性が高い。19T で検出した井戸状土坑は遺構底部に土師器や木製品を包含していた。30T で検出した溝状遺構は、覆土に数度の掘り返しが観察できた。また、覆土には弥生時代と平安時代の土器が多量を含まれていたが､弥生土器は掘り込みに伴い混入したものであろう。

(2) 遺物　1 ～ 7 は弥生土器である。法仏式～月影式に対比される。8 ～ 24 は平安時代の土器である。8 ～ 20 は 9 世紀前半に位置づけられる。このうち､8 ～ 11 は東海的な形態をもつ在地窯産の須恵器であり、やや時期が遡る可能性がある。12 ～ 15 は佐渡小泊窯産である。16 ～ 0 は在地窯産である。そして、21･22 は 10 世紀初頭に帰属する資料である。また、23･24 は漆書のある須恵器、25 は墨書土器である。

まとめ　遺跡は自然堤防状の微高地に立地すると推測される。弥生時代においてこの傾向は顕著で、狭小な微高地における短期的な活動が想起される。一方、平安時代においては離水部分が若干広がり、そこに集落が形成されていたと推測されるが、八丁沖の遷移も考慮に入れながら慎重に検討を進めたい。

第 21 図　トレンチ位置図（1/5000）及び土層柱状図（1/40）



第 22 図　遺物実測図（1/4）

は赤彩を示す

写真 21　遺物出土状況（13T）

写真 22　溝状遺構（30T）

写真 23　井戸状土坑（19T）

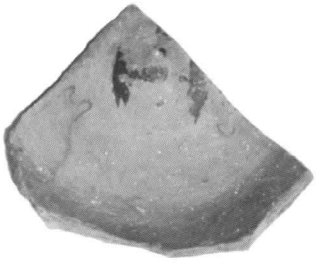


写真 24　漆書須恵器

写真 25　漆書須恵器

写真 26　墨書土師器

浅田遺跡

調 査 地　長岡市富島町字浅田　　調査面積　89.3 ㎡（対象面積 14,500 ㎡）
調査期間　平成 17 年 10 月 28 日～ 11 月 4 日　　調査担当　鳥居美栄

遺跡の概要　猿橋川の左岸、宮下工業団地から約 150m 北方に位置する。標高は 16 ～ 17m で、主に水田として利用されているが、一部が畑となっている。分布調査では南北に流れる素掘りの用水路周辺で弥生時代後期から古墳時代前期とみられる土器片が採集できた。

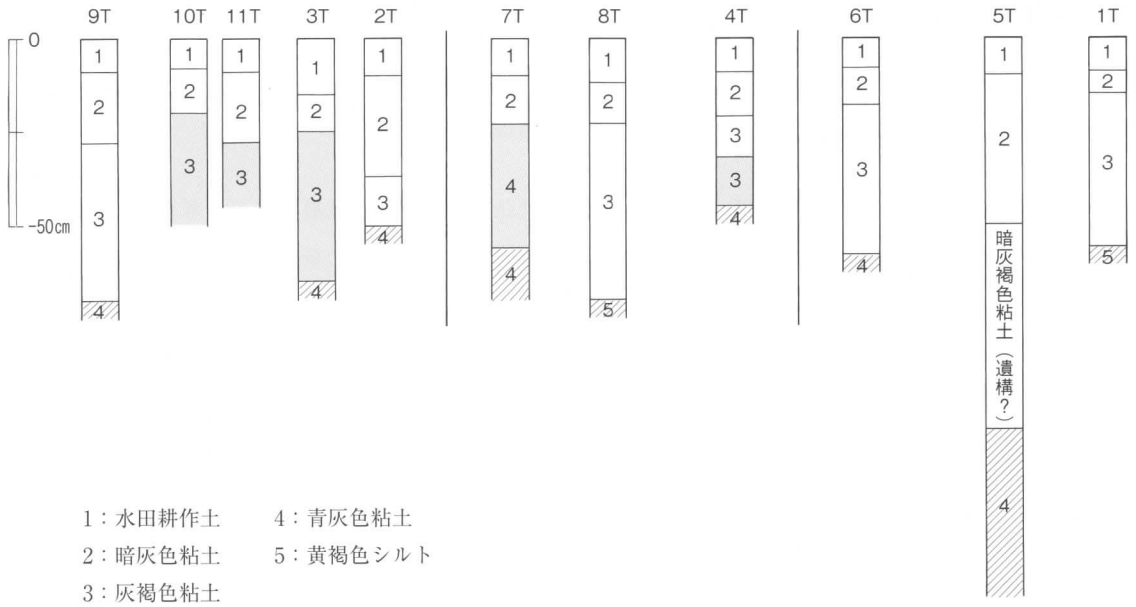
調査の結果　2m × 4m を原則として 11 箇所の調査トレンチを設定した。明瞭な遺構は検出できなかったが、6 箇所のトレンチで遺物が出土した。耕作土、盛土とみられる暗灰色粘土層、遺物を包含する灰褐色粘土層が確認でき、青灰色粘土層または黄褐色シルト層が地山である。

(1) 遺構　明らかに遺構と判断できる落ち込みなどは確認できなかったが、5T で木の杭 2 本を検出した。杭には加工痕があり、現存する杭上部から約 85cm 下の周辺で、断片的だが葦を敷いたような状況が確認された。杭の周囲は暗灰褐色粘土で、低湿地に設けられた施設である可能性がある。5T では時期を判断できる遺物が出土しておらず、杭の時期などは不明である。

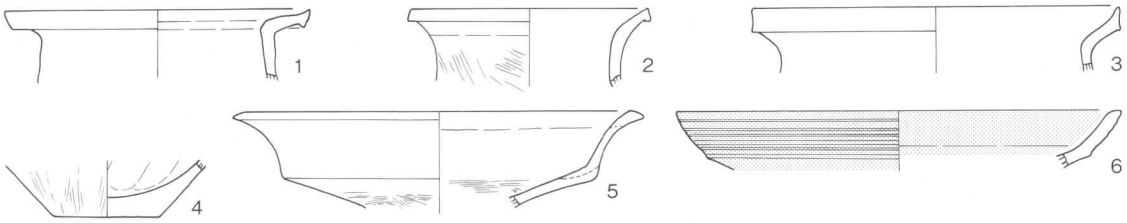
(2) 遺物　弥生時代後期のものとみられる土器片や時期不明の木製品、緑色凝灰岩の剥片が出土した。図示した遺物は弥生土器で、1 は 3T、2 ～ 4 は 11T、5・6 は 10T の出土である。1・3・4 は甕、2 は壺、5 は高坏坏部、6 は器台受部である。6 は内外面とも赤彩されている。このほかに 4 のような甕や壺の底部が水路脇で 2 点採集できた。木製品（写真 29・30）は 5T の出土である。用途などは不明であるが、表面に彫り込みがあり、その両脇に金線で唐草文が描かれている。

まとめ　今回の調査では住居跡などの明確な遺構は確認できなかったが、自然堤防上に営まれた弥生時代後期の遺跡があると推定される。また、5T における杭などの出土状況から、低湿地での活動を視野に入れた小集落である可能性が指摘できる。本遺跡とほぼ同時期の遺物が出土する五百刈遺跡や榎町遺跡が周辺に所在しており、それらの遺跡との関係を把握することも今後の課題である。

第 23 図　トレンチ位置図（1/5,000）



第 24 図　土層柱状図（1/20）



第 25 図　遺物実測図（1/4　　は赤彩）

写真 27　土器出土状況（10T）

写真 28　出土遺物

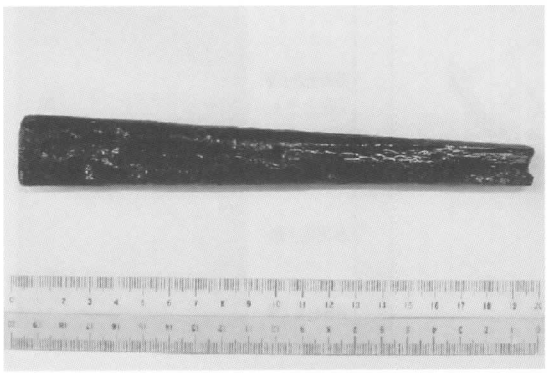


写真 29　木製品

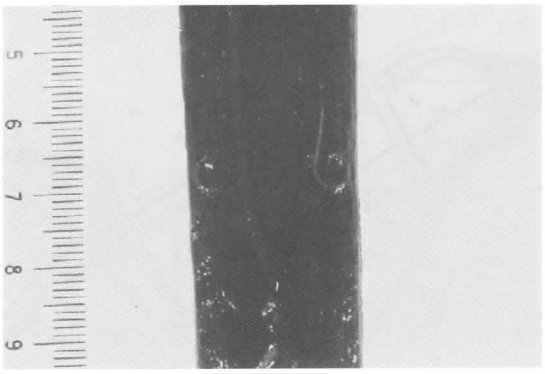


写真 30　木製品、装飾部分

7　深沢地区試掘調査

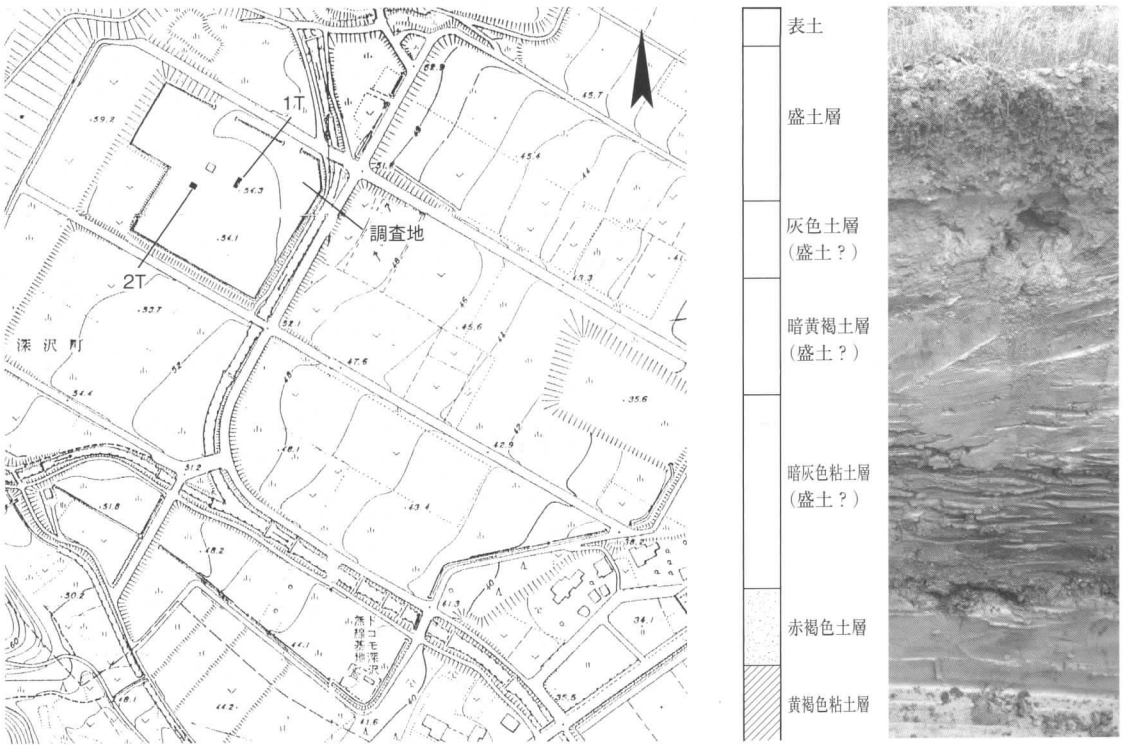
調 査 地　長岡市深沢町岩野原　　調査面積　26 ㎡（対象面積 116 ㎡）

調査期間　平成 17 年 11 月 24 日　　調査担当　新田康則

調査に至る経緯　平成 17 年 10 月 4 日、帝国石油株式会社新潟鉱業所長岡鉱場（以下、帝石長岡鉱場と省略）より、長岡市教育委員会に対し、同社岩野原基地おける天然ガス井戸の新設に伴い、埋蔵文化財についての取扱いについての問い合わせがあった。帝石長岡鉱場及び長岡市教育委員会の両担当者で当時の施工図等を確認したところ、開発予定地は過去に造成工事等が行われているが、用地南東側は盛土部分であり、旧地形が残されていると推測された。このため長岡市教育委員会は、岩野原遺跡（縄文時代中～後期）や岩野原窯跡（8 世紀中頃）の近接地であることも踏まえ、旧地形の残存部に未周知の遺跡が存在する可能性があると判断した。そして、過去の施設配置図と新規の施設配置計画図により、埋蔵文化財保護行政上の処置として、開発範囲の一部において試掘調査の実施が望ましい旨を回答した。帝石長岡鉱場からは試掘調査の趣旨を御理解いただき、調査実施が決定した。

調査地の概要　調査地は、信濃川左岸に形成された河岸段丘上（上富岡面）に位置する。前述した通り、調査地の付近は昭和 50 年代の造成工事や土砂採取などの開発事業により大きく地形改変を受けている。調査地である帝石長岡鉱場岩野原基地は、昭和 60 年代に天然ガス井戸が削井されたが、旧施設の基礎部分を残して現在おおむね更地となっている。

調査の結果　開発による掘削予定範囲 362 ㎡のうち、未掘削と推測された部分を対象に試掘調査を実施した（第 26 図）。その結果、調査トレンチ 2 箇所において予想に反する規模の開発痕跡（切土及び盛土）が認められ、遺構・遺物ともに検出することはできなかった。調査範囲外、特に岩野原基地南東端に遺跡が存在する可能性はあるものの、今回の開発工事は影響がないものと判断した。



第 26 図　調査地の位置（1/5,000）及び 1T 土層柱状図（1/20）

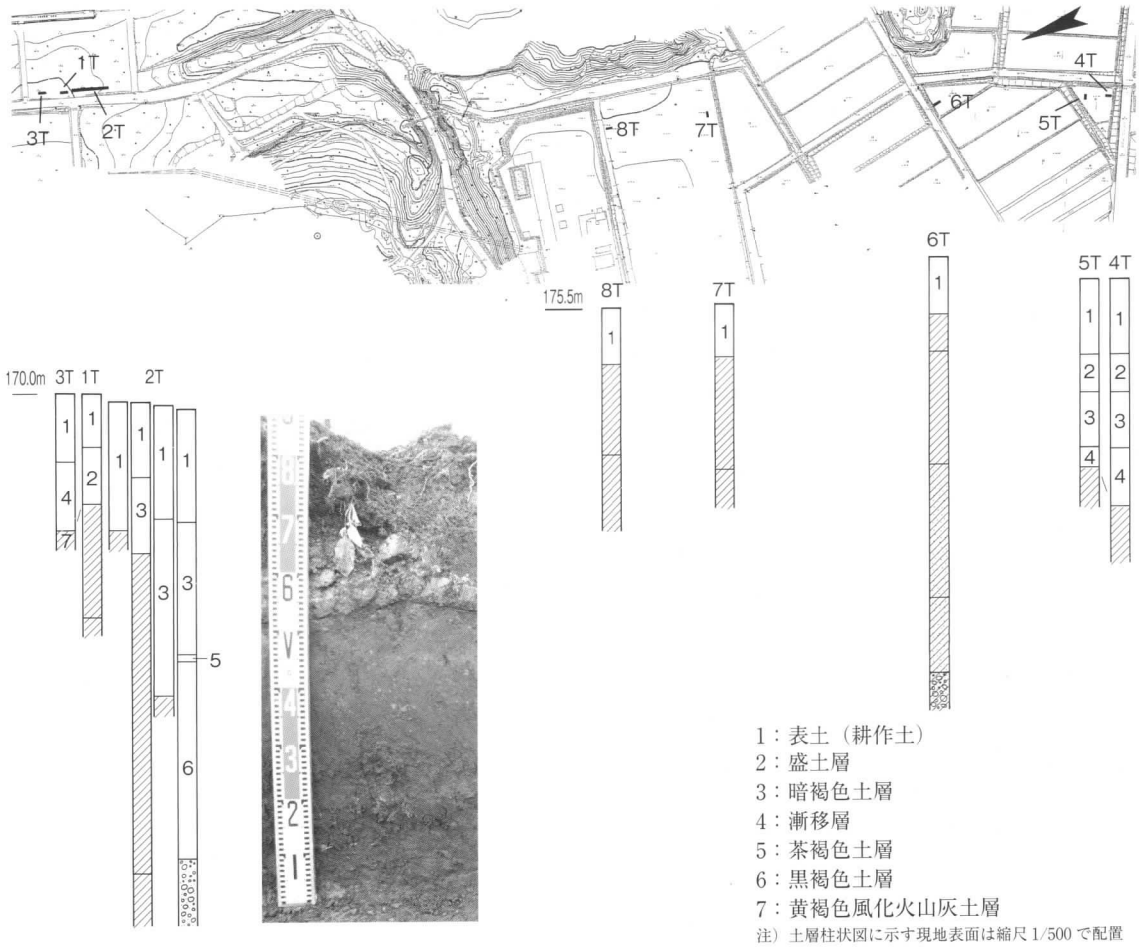
8　越路原地区試掘調査

調 査 地　長岡市東谷 1621 番地 7 ほか　　調査面積　72.6 ㎡（対象面積 3,875 ㎡）
調査期間　平成 17 年 11 月 10 日～ 11 日　　調査担当　新田康則

調査に至る経緯　平成 17 年 6 月 7 日、長岡市役所越路支所建設課から市道越路 660 号線改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての問い合わせがあった。長岡市教育委員会は開発計画を検討し、試掘調査実施が望ましい旨を回答した。これは、越路原段丘において段丘縁辺部や開析谷周辺に遺跡が残存している傾向があり、開発予定地においても未周知の遺跡が存在する可能性があるためである。当初調査の実施を 7 月上旬としたが、6 月 27 ～ 28 日の豪雨災害により復旧事業が頻発した影響で事業が一時中断となった。事業再開後、工程等について再度協議を重ね、土地所有者の調査承諾を待って調査を実施した。

調査地の概要　調査地は越路原Ⅰ段丘東縁に位置し、また、「クマンタニ」と呼ばれる開析谷を南北に挟む区域である。越路原段丘には東に向かって走る大きな開析谷が数本入っており、クマンタニの北に位置する谷の付近には婆々懐遺跡（縄文中～後期）や俣沢遺跡（縄文中～晩期）が立地している。

調査の結果　開発予定面積約 12,600 ㎡に対し、旧地形把握も視野に入れながら、合計 8 箇所で試掘調査を実施した。しかし、遺構・遺物は検出できなかった。谷頭付近では黒ボク土層の下部（茶褐色土層～漸移層）が残存しているものの、開発区域の大部分において、黒ボク土層が削られているものと推測される。したがって、今回の開発工事は埋蔵文化財保護行政上に特に問題がないものと判断した。



第 27 図　トレンチ位置図（1/5,000）及び土層柱状図（1/20）

9　飯塚原地区試掘調査

調 査 地　長岡市飯塚115番地1ほか　　調査面積　69.6㎡（対象面積672㎡）
調査期間　平成17年10月12日～14日　　調査担当　新田康則

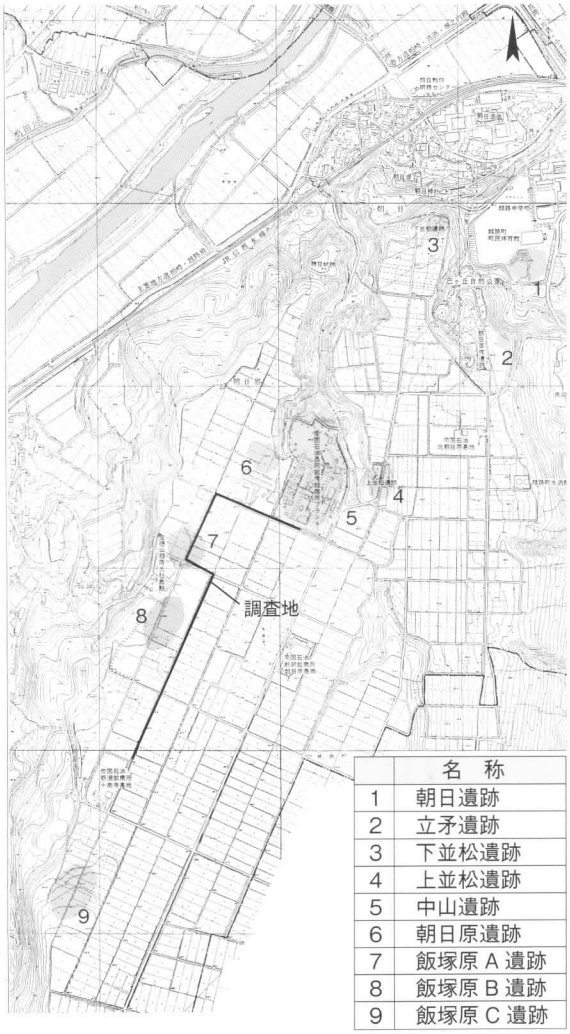
調査に至る経緯　平成17年6月6日、帝国石油株式会社新潟鉱業所長岡鉱場から、同社十楽寺基地から越路原天然ガス処理プラントへのフローライン新設工事に伴い、埋蔵文化財包蔵地の取扱についての問い合わせがあった。長岡市教育委員会は、開発計画を検討し、工事区域周辺には周知の遺跡が密に分布しているため（第28図）、試掘調査の実施が望ましい旨を回答した。その後の協議を通して、帝石長岡鉱場及び関係者から試掘調査の趣旨を御理解いただき、調査実施が決定した。施工区域の大部分が農道であるため、試掘調査による道路占用は稲刈り後の農閑期に設定した。

調査地の概要　調査地は越路原Ⅰ段丘面北側西縁に位置している。周辺には上並松遺跡（縄文時代中～後期）・中山遺跡（縄文時代後～晩期）・朝日原遺跡（縄文時代中・晩期）などが分布している。また、調査地に近接して、宝徳稲荷神社の奥宮が建っているが、社伝にはその歴史が縄文時代にまでさかのぼると記す。一説には、奥宮建設の際に縄文時代の遺物が出土したと言われているが、その詳細は不明である。

調査の結果　開発面積約1,100㎡に対し、672㎡を対象として試掘調査を実施した。トレンチ幅は工事掘削幅に合せて0.8m、長さは任意とした。調査区域は全体に地形改変を受けているものの、黒ボク土層（黒褐色土層～漸移層）が残存している状態であった。また、地山層（黄褐色風化火山灰土層）上面を指標とした場合、南から、10T付近・5T付近・18T付近を軸とした谷地形となり、地形がたわんでいる様子が看取される（第29図）。

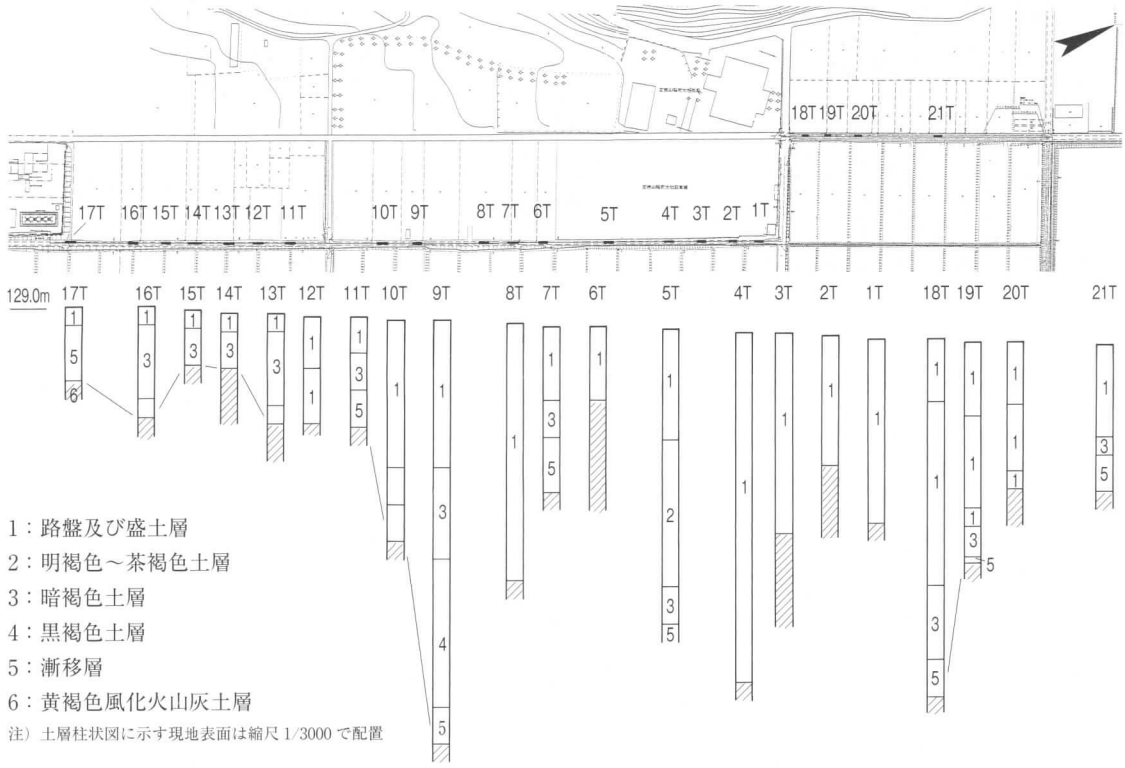
そして、合計21箇所の試掘トレンチのうち、7Tで土坑、14T及び17Tで溝状遺構、18～21Tで土坑を検出した。遺構覆土層及び周辺土層からの遺物出土がなかったため、これら遺構の時期は不明である。ただし、14T及び17Tで検出した溝状遺構は近・現代の新しい掘り込みであろう。

一方、18T～21Tの区域については、『越路町史』資料編1〔1998〕に「飯塚原A遺跡」（縄文時代の遺跡包蔵伝承地）として記載されている範囲と重なることを踏まえると、縄文時代の遺跡である可能性が残される。したがって、これを新たな埋蔵文化財包蔵地として周知化する方向で検討する。ただし、今回の開発に対する埋蔵文化財行政上の取扱いとしては、工事における掘削幅が0.8mと狭いことも考慮して、事業者に慎重工事を要望するに留めた。

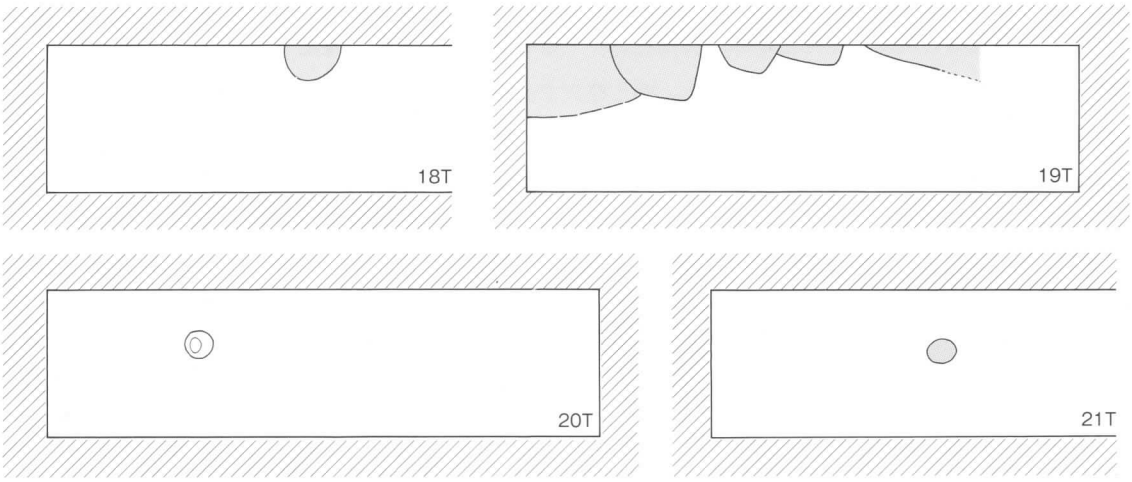


	名　称
1	朝日遺跡
2	立矛遺跡
3	下並松遺跡
4	上並松遺跡
5	中山遺跡
6	朝日原遺跡
7	飯塚原A遺跡
8	飯塚原B遺跡
9	飯塚原C遺跡

第28図　調査地と周辺の遺跡（1/20,000）



第 29 図　トレンチ位置図（1/3,000）及び土層柱状図（1/20）



第 30 図　遺構確認状況（1/40）

写真 31　土層堆積状況（21T）　　写真 32　遺構検出状況（20T）　写真 33　遺構完掘状況（20T）

10　上段遺跡確認調査

調 査 地　長岡市小国町相野原　　調査面積　464 ㎡（中里南地区 17 年度対象面積 70,000 ㎡）

調査期間　平成 17 年 5 月 25 ～ 27 日　　調査担当　池田淳子

調査に至る経緯　長岡市小国地域のほぼ中心部に位置している中里南地区では、平成 10 年に県営ほ場整備事業が計画され、平成 14 年から試掘調査を行ってきた。2 箇所で遺跡が発見されたが、そのうちの上段遺跡は平成 15 年 10 月の試掘調査により発見された遺跡である。調査結果をもとに新潟県柏崎地域振興局と協議を行い、田面の高さを上げることにより本発掘調査を回避することとなった。農道をはさんだ南側については遺跡の広がりが未確認であったため、平成 17 年 5 月に確認調査を行い、遺跡の範囲を確定した。確認調査と合わせて周辺の試掘調査も行った。

遺跡の概要　小国地域は周囲を標高 400m ほどの山々に囲まれた小盆地で、中央に第 1 級河川・渋海川が流れている。上段遺跡は渋海川右岸の低位段丘上に位置しており、現況は水田である。かつては渋海川の氾濫原と伝えられてきたため付近には周知の遺跡は存在しなかった。100m 北西には江戸時代に上流から流されてきたと伝えられる仏像を安置した観音堂がある。西側に向かって緩やかに下がる地形であるが、ところどころに起伏があり、上段遺跡も微高した部分に位置する。標高は 76m 前後である。

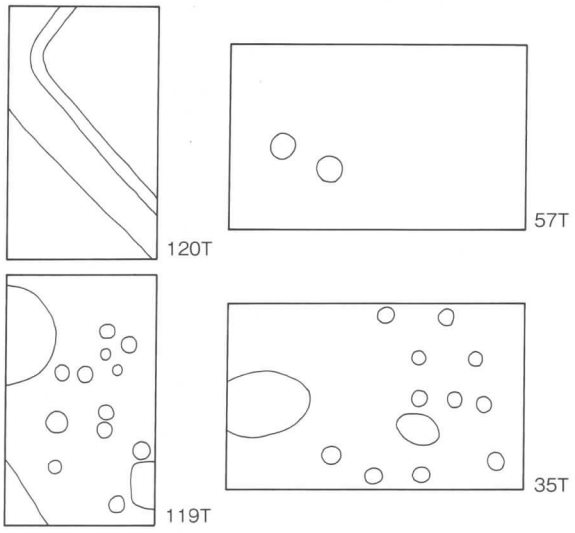
調査の結果　平成 15 年度の調査結果も含めて上段遺跡の概要を報告したい。

(1) 基本層序　明確な包含層が確認できたトレンチは 3 箇所である。灰色粘土の水田耕作土が 20 ～ 30cm あり、その下 20cm ほど下部にある炭を多量に含んだ暗褐色粘土が包含層である。他と識別しやすく、20 ～ 40cm ほど認められた。黄褐色礫層、黄褐色シルト層の地山面で遺構が確認できた。

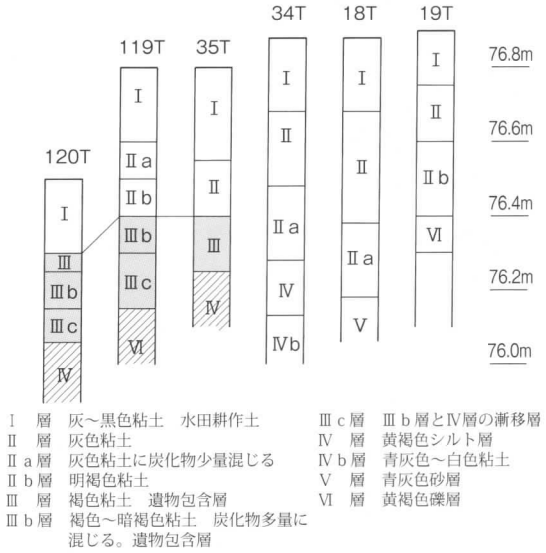
(2) 遺構　4 箇所のトレンチで確認できた。溝と柱穴である。包含層出土遺物から中世の可能性が高い。

(3) 遺物　今回報告する資料は 15 年 10 月試掘調査・17 年 5 月試掘・確認調査で出土したものと、周辺の採集資料である。トレンチごとに並べて、後に表採資料を掲載した。

第 31 図　中里南地区周辺の遺跡（1/10,000）



第 32 図　遺構図（1/150）



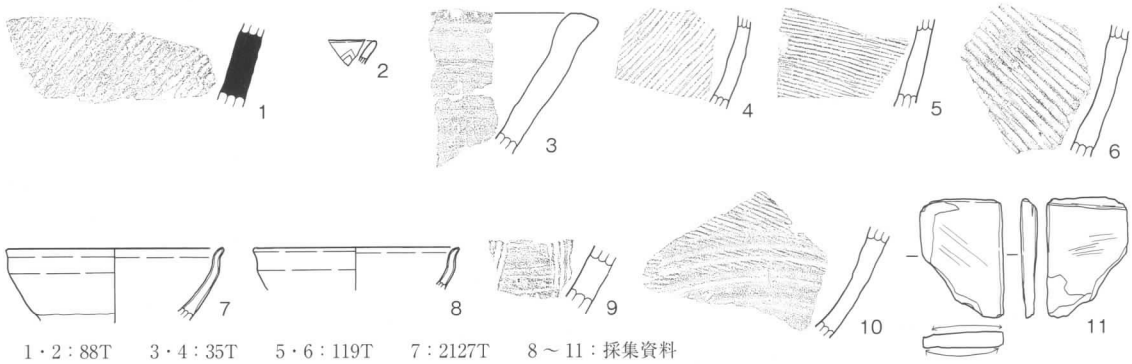
第 33 図　土層柱状図（1/20）

第 34 図　トレンチ配置図（1/2,500）

1は須恵器甕の胴部破片で、外面は平行叩きで内面にはハケ目調整痕がある。2は連弁文が施される青磁椀である。小破片であるが、胎土は灰色で、釉はうすい緑色である。時期は14世紀後半ごろと考える。3は珠洲焼片口鉢の破片であり、体部が直線的にひらくもので吉岡編年のIV期で14世紀後半ごろである。4は珠洲焼壺の胴部破片、5・6は壺か甕の胴部破片である。4・5は叩き目がやや細密で、III期で13世紀後半ごろの可能性がある。7・8は国産天目で、ともに釉は光沢のない黒褐色であり、径は7が11.6cm、8が11cmである。16世紀前半ごろに位置づけられる。9は珠洲焼の片口鉢胴部破片で、10は壺の底部付近である。11は鳴滝産の砥石で、白っぽいピンク色である。側面には切り出し時の擦痕が残る。

まとめ　上段遺跡は平安時代の遺物はわずかであり、主体は中世である。現在でも渋海川から500mほどしか離れていない位置に中世の遺跡が存在したことで、低位段丘上にも遺跡があった可能性は高くなり、今後の試掘調査の方法を検討する必要があると考える。

参考文献：吉岡康暢 1994『中世土師器の研究』吉川弘文館



第35図　出土遺物（1/4）

写真34　調査地遠景 北東から

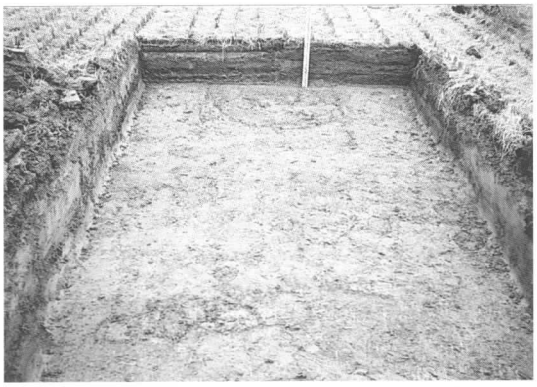


写真35　35T 遺構検出状況

写真36　119T 土層断面

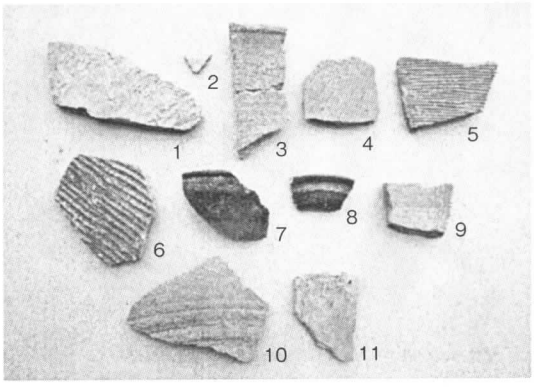


写真37　出土遺物

11　小国北部地区試掘調査

調 査 地　長岡市小国町七日町　　調査面積　540 ㎡（対象面積 100,000 ㎡）

調査期間　平成 17 年 10 月 18 日～ 20 日　　調査担当　池田淳子

調査に至る経緯　小国北部地区では、経営体育成基盤整備事業の計画に伴い、平成 15 年に分布調査を実施した。その結果、数箇所で遺物が採集できたため、試掘調査が必要な地域を設定し、平成 16 年度から工事予定に合わせて試掘調査を行った。平成 17 年度は面工事予定地内において試掘調査を行った。

調査地の概要　小国北部地区は渋海川が形成した低位段丘上に位置する。現況は水田である。渋海川の氾濫原と伝えられ、あぜなどに砂利が見られる水田もある。南東の微高地には平安～中世の築先遺跡がある。

調査の結果　3m × 4m のトレンチを 45 箇所設定した。堆積状況は地点で異なるが、耕作土から 30cm 下で褐色礫層となる所や、50cm 以上の青灰色粘土の堆積が見られた所があった。渋海川の氾濫によるものと考える。遺構・遺物は発見されず、明確な遺物包含層もないため開発工事は問題ないと判断した。

第 36 図　トレンチ位置図 (1/5,000)

第 37 図　周辺の遺跡 (1/20,000) と土層柱状図 (1/40)

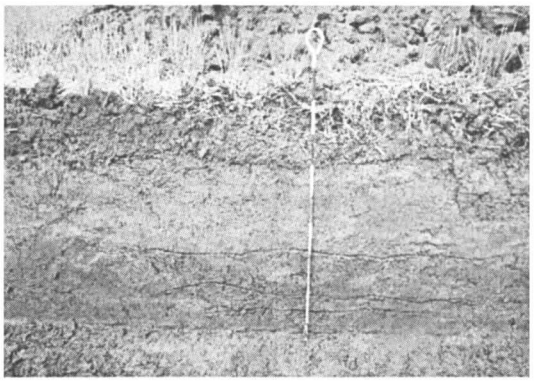


写真 38　33T 土層断面

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどながおかしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成17年度長岡市内遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	駒形敏朗・鳥居美栄・新田康則・池田淳子・小林徳・八重樫由美子
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	〒940－0072　新潟県長岡市柳原町2番地1
発行年月日	2006年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
きんぱちいせき 金八遺跡	ながおかしてらどまりひきおかあざやまざき216ばんち 長岡市寺泊引岡字山崎216番地	152021	1201	373746 1384653	20050927 ～20051111	30.0㎡	経営体育成基盤整備事業
きんぱちあまごいやまいせき 金八雨乞山遺跡	ながおかしてらどまりひきおかあざあまごいやま636ばんち 長岡市寺泊引岡字雨乞山636番地	152021	1211	373741 1384657	20050927 ～20051111	30.0㎡	経営体育成基盤整備事業
ちょうはちいせき 長八遺跡	ながおかしてらどまりひきおかあざあまごいやま466ばんち 長岡市寺泊引岡字雨乞山466番地	152021	1212	373739 1384701	20050927 ～20051111	12.0㎡	経営体育成基盤整備事業
やすけいせき 弥助遺跡	ながおかしてらどまりひきおかあざやまざき519ばんち 長岡市寺泊引岡字山崎519番地	152021	1213	373738 1384708	20050927 ～20051111	12.0㎡	経営体育成基盤整備事業
みやうちやかたあと 宮内館跡	ながおかしなかのしまみやうち 長岡市中之島宮内	152021	396	373258 1385011	20051017 ～20051025	36.0㎡	県営ほ場整備事業
みやうちかもたいせき 宮内鴨田遺跡	ながおかしなかのしまみやうちあざかもた1570ばんち1 長岡市中之島宮内字鴨田1570番地1	152021	1251	373258 1385009	20051017 ～20051025	60.0㎡	県営ほ場整備事業
かみきつねごうやいせき 上狐興野遺跡	ながおかしきつねこうや222ばんち 長岡市狐興野222番地	152021	1252	373259 1384948	20051017 ～20051025	18.0㎡	県営ほ場整備事業
ながろいせき 長呂遺跡	ながおかしながろあざまつのきの517ばんち 長岡市長呂字松ノ木野517番地	152021	1253	373242 1385008	20051017 ～20051025	12.0㎡	県営ほ場整備事業
にしはっちょういせき 西八町遺跡	ながおかしとみじまちあざにしはっちょう 長岡市富島町字西八町	152021	611	372912 1385355	20051011 ～20051011	44.0㎡	県営ほ場整備事業
のげまいせき 抜間遺跡	ながおかしとみじまちあざのげま 長岡市富島町字抜間	152021	610	372847 1385337	20051011 ～20051017	209.5㎡	県営ほ場整備事業
めくだらいせき 盲田遺跡	ながおかしとみじまちあざめくらだ 長岡市富島町字盲田	152021	608	372837 1385322	20051017 ～20051027	173.2㎡	県営ほ場整備事業
ごっひゃっかりいせき 五百刈遺跡	ながおかしとみじまちあざごひゃっかり 長岡市富島町字五百刈	152021	609	372834 1385342	20051011 ～20051031	388.0㎡	県営ほ場整備事業
あさだいせき 浅田遺跡	ながおかしとみじまちあざあさだ 長岡市富島町字浅田	152021	607	372823 1385346	20051028 ～20051104	89.3㎡	県営ほ場整備事業
いいづかはらえーいせき 飯塚原A遺跡	たかおかしいいづか115ばんち1ほか 長岡市飯塚115番地1ほか	152021	1254	372311 1384553	20051012 ～20051014	69.6㎡	天然ガス処理施設関連工事
うわだんいせき 上段遺跡	ながおかしおぐにまちあいのはら398ばんちほか 長岡市小国町相野原398番地ほか	152021	604	371726 1384200	20050525 ～20050527	200.0㎡	県営ほ場整備事業

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
きんぱちいせき 金八遺跡	遺跡包蔵地	平安	なし	土師器	
きんぱちあまごいやまいせき 金八雨乞山遺跡	遺跡包蔵地	平安	なし	土師器、須恵器	
ちょうはちいせき 長八遺跡	遺跡包蔵地	平安	なし	土師器、鉄製品	
やすけいせき 弥助遺跡	遺跡包蔵地	不明	なし	なし	
みやうちやかたあと 宮内館跡	城館跡	戦国	なし	なし	
みやうちかもたいせき 宮内鴨田遺跡	遺物包含地	平安	なし	土師器、須恵器	
かみきつねごうやいせき 上狐興野遺跡	遺物包含地	平安	なし	土師器、須恵器	宮内館跡の下層
ながろいせき 長呂遺跡	遺物包含地	平安	なし	土師器、須恵器	
にしはっちょういせき 西八町遺跡	遺物包含地	不明	なし	なし	
のげまいせき 抜間遺跡	遺物包含地	奈良・平安	柱穴　土坑	土師器、須恵器	
めくだらいせき 盲田遺跡	遺物包含地	平安	溝　土坑	土師器、須恵器	
ごっひゃっかりいせき 五百刈遺跡	遺物包含地	弥生・平安	溝　土坑	弥生土器、土師器、須恵器、墨書土器、漆書土器、木製品	「山」漆書・「南」墨書出土
あさだいせき 浅田遺跡	遺物包含地	弥生	なし	弥生土器、土師器、木製品	
いいづかはらえーいせき 飯塚原A遺跡	遺物包含地	縄文	土坑	なし	
うわだんいせき 上段遺跡	集落跡	平安・中世	柱穴　溝	須恵器、珠洲焼、青磁、国産天目、砥石	

平成17年度　長岡市内遺跡発掘調査報告書

平成18（2006）年3月24日印刷
平成18（2006）年3月24日発行

発 行　新潟県長岡市教育委員会
印 刷　株式会社　第一印刷所 中越支店